

冒險探檢粉塵記



駄作者 文福洞先斗

2020

おことわり

本改訂版は自然文化誌研究会会報『ナマステ』連載（2014～2019）のエッセイに加筆修正するとともに、余話を追加しています。また、人名は本名と仮名が混じっています。内容も事実に加えて、一部虚構が混じっていますので、私小説風であるをご理解くださり、そのままを信じないようにご注意をお願い申し上げます。また、文体は内容によって変わっていますが、情緒を大事にしたいのでお許してください。



文福洞のシンボル瀬戸物の狸

少年の頃、宝物（ビー玉、しょうや）を背面の穴に隠していた。

目次

- 第 1 話 マリア様のもとで
- 第 2 話 消えない罪と罰
- 第 3 話 色恋のことども
- 第 4 話 学大探検部を創る
- 第 5 話 人生を旅に過ごす
- 第 6 話 二言で世界を渡る法
- 第 15 話 学術探検の道具
- 第 12 話 やっと間に合った男の後塵
- 第 7 話 キビに魅かれて文明の十字路へ
- 第 8 話 環境教育学の創業のころ
- 第 9 話 環境教育研究センターの創業のころ
- 第 10 話 国際的な環境教育活動
- 第 16 話 ポンちゃん最後の冒険
- 第 11 話 雑穀街道を FAO 世界農業遺産に
- 第 17 話 ポンちゃん冒険の始まりの再発見
- 第 14 話 起源を探る風狂の旅
- 第 13 話 花のように生きなくなった日本人
- 第 18 話 ヨーロッパの美しい村や街を訪ねて
- 第 19 話 最期の未来を探しに辺境へ**
- 第 20 話 これからも面白い冒険探検

第1話 マリア様のもとで

連載を始めるに当たり、最初にお断りしておきます。この冒険探検粉塵記はうらない作家、文福洞先斗の私小説風、虚実絢交ぜになったフィクションです。いたって誠実な半生の面白悲しさの真実を綴ります。

おみゃーさん、知つとりゃーすか。ポンちゃんはかの有名なえびふりゃーの街、名古屋で育ったんだぎゃー。今では、名物はきしめん、味噌煮込みうどん、てんむす、ひつまぶしと発展しておりゃーすが、子どもの頃は何も知らずにこれらを食べたこともないがや。

ポンちゃんは老舗和菓子屋ぶんぶく洞の御曹司だったのです。小学校1年生のころに、祖父が他界するまで、ぶんぶく洞は上前津と覚王山日泰寺参道に2店ありました。織田信長が創設した甚目寺にも和菓子を納めていました。このため、戦後の貧しい時期にもかかわらず、甘いものには不自由しませんでした。しかも、近所の名門東海教会幼稚園に1年間行かせてもらいました。マリア様のもとで、就学前のひと年を過ごしたのです。ところが、ご近所には文化住宅（アパート）に住む、裕福なサラリーマン家庭が多く、こうした家の御子息は幼稚園に2年間も行くのです。1年しか行けないポンちゃんら自営業の貧民の子は、幼稚園で先に入っていた同級生ギャングに虐げられました。幼児のうちから、子ども集団の中で、差別や格差を刷り込まれたのです。この結果、直情的で、正義感が強いポンちゃんは反抗的なひねくれ者に育ってしまいました。しかし一方、マリア様のもとで、信仰への敬意はしっかりインプリントされていました。

ポンちゃんは病弱で、鈍くさかったので、いつもお弁当をこぼしてしまいます。そこで、近所の女医さんは牛乳を与えることを勧め、幼稚園の先生はパンをもってくるように示唆したのです。おかげで、チョコパンばかり食べていたので、肌は健康な小麦色になりました。その後、運動は苦手でも下手の横好きで、いろいろやってみました。卓球、水泳、バスケット、……。野球はピッチャーでした。なぜ、エースかって、外野にすればすべてホームランにしてしまうから、打たせて取らせる作戦なのです。最も長続きたのはラグビーでした。高校ではかの高名な瑞穂ラグビー場で試合しました。GFも見に来たので、お情けで後半出してもらい、張り切ったのですが、勝利の味は知りません。走るのが好きで、陸上リレーで1位になったこともあります。すべては同級生の頑張りの成果です。大学では航空自衛隊の大男たちとも試合しましたが、国立大学生なら頭で勝てと小ばかにされて負けてしまいました。

ポンちゃんは読書好きで、『冒険王』は愛読書、小学5年生の時には『少年サンデー』や『マガジン』が創刊されました。月光仮面や赤胴鈴之助、ゼロマンや鉄人28号は面白かったです。2枚の風呂敷を覆面とマントにし、自転車の車輪には段ボール紙を挟んで、爆音を響かせ、サタンの爪と戦いました。鶴舞公園の円墳で坂を転がると、めまいがします。これを真空切りと叫んでからしていました。確か、6年生の時には自分で新聞を発行し、アンモナイト大発見の記事を書いていました。探検家に憧れて、「海底2万哩」や「十五少年漂流記」は好きでしたが、長ずるに及んで次第にノンフィクション探検記に読書傾向が移っていきました。

できんぼで泣き虫でしたが、ポンちゃんは番長には従わず、だれの子分にもなりません。毎日、教室の机や椅子をひっくり返して、大喧嘩に明け暮れました。それでも理はこちらにあったので、意外に優等生がひそかに味方してくれていました。いじめに屈す

ることはなかったのです。なぜなら、ジャイアンに喧嘩の仕方を習ったので、泣きながらも、番長にダメージを与えられるよう、元気になったからです。女の子にも目が大きいからという理由で、仲間外れにされ泣かされていました。ただ一度だけ、大いに泣かしてしまったことがあります。軟式テニスボールに穴をあけて、この中に小麦粉を詰めて、握りしめると、白煙が立ちます。つまり忍者の煙幕です。たまたま通りかかった運の悪い女の子にかかってしまい、頭が真っ白けになってしまいました。

6年生の時、親友のジャイアンが番長らに侮辱されたので、講堂で2対10の大乱闘をしました。さすがに勝ち目はなく、恐ろしい職員室に初めて訴えに行ったのです。ところが先に手を出したお前が悪いと一喝されました。これ以来、先公に強い不信を抱き、ひそかに反抗することになりました。また、中学生になって腕力が強くなってからは、だれもボンちゃんにちょっかいを出さなくなりました。大きくなってからの暴力は犯罪ですからね。喧嘩をしてはいけません。



写真：左は東海幼稚園の同級生たち、右は小学校1年生の頃、幼児は弟

第2話 消えない罪と罰

御器所小学校では教室の床の隙間から、お小遣いや鉛筆などが落ちてしまうのです。このため木造校舎の縁の下に潜って、5円や10円玉を探索しました。5円あればコロケが1個買えるのです。10円あればお好み焼きが食べられるのです。もちろん先生にいい子ぶって届はしませんでした。でも、こんな僥倖は6年間に1回もあったかどうか。しかし、この罪はいまだに許されず、その後1円たりとも見つけたら、自分の財布に入れなくて、寄附箱に入れるようにしています。さらに、桜山中学校以降は、友人たちと花をバス停に活けるなど、ボランティア活動や途上国への寄附に、お小遣いや給料の一部を使い、ついには東京で家が建つほどの出費をすることになり、大変な罰を受けてしまいました。

2B弾で毛虫を虐殺し、かんしゃく玉地雷を石の下に置きました。セルロイド製下敷きを細かく切って、アルミ製キャップに詰めて、ロケットを作りました。釘ナイフは、今は無き市電に釘を轆いてもらい、コンクリートで研いで作りました。校舎は大方木造2階でしたが、6年生は敗戦後建築された鉄筋3階に入れたのです。風船水爆弾を3階から落とした奴らもいました。ポンちゃんは憶病でしたが、恥ずかしくて言えないいたずらも数多くしました。こうした楽しい悪さは秘密裏に行っていたのですが、即、告げ口する奴もいて、校長に朝礼で叱られて、なにもかも禁止されてしまいました。この罪も許されることなく、やはり大変な罪滅ぼしをしました。生物多様性保全や環境保全のために人生の時間を多く使うことになりました。

小学5年生の頃、学校花壇のチューリップ球根3個を勝手に拝領し、自分の花壇に植えました。親友の一人も共同正犯だったと思います。長ずるに及んで、帰省のたびに小学校の前を通ると、100倍にして返そうと思いましたが、いまだにできないでいます。なぜなら、友人のお父さんは多分、特別公務員であったし、ポンちゃんも公務員になってしまったので、この罪は隠さざるを得ないのです。その後、ポンちゃんは真に潔癖に、どの様な状況であれ、取ったりしないようにしました。しかし余談ですが、大学生の時は、知人がミカン畑でミカンを取って1っこ食べるとポンちゃんに放りました。不運なことに、畑には耕作者がいて、こっぴどく叱られました。「くれと言えややるものを、なぜ無断で取るのだ」と、自分では決してしないことですが、この場合共同従犯になってしまいました。

そうだ、余談ついでに、韓国に行って、夢中になって畑で雑草を調査していたら、頭上には柿の木があったのです。「桃李に冠を正さず」ですが、やはりとがめられ、同伴の韓国学生が柿を取ろうとしていたのではないと弁明したら、「わかった、柿をやろう」と笑顔で言われました。アザドカシミールではうっかり夢中になって同じく草取りをしていたら、パキスタン軍に小銃でねらわれていました。

これらの罪業により、子どものため、学校のために、また、終生、小規模農家の一員としてたくさんのボランティア活動をしました。自分でも実習や実験のために耕作していましたが、国有財産のために持ち帰ることはできませんでした。勤め先では学生や近隣住民によって何度もせっかく丹精した植物・作物が盗難にあいました。最近、山里の畑で、猿にトウモロコシとカボチャをすっかり取られてしまいました。悔しいですが、これも贖罪でしょうか。写真は猿に食べつくされたトウモロコシ、および電気柵で囲まれた畑です。ポンちゃんの畑にもやっと簡易柵ができ、今冬の鹿の大麦食害は防げると思いますが、うっかり電源を切らなかったので、自分がびりびり感電しました。



写真：左は猿に食べられたトウモロコシ、右は電気柵と雑穀畑。

第3話 色恋のことども

今やポンちゃんは売らない作家として無名になり始めた。先日、さる会合で自己紹介したら、ご婦人たちから、「うらないって大好き、是非占って下さい」と言われた。実は、小生はこっちの占いも好きだ。正月にはネット無料恋占いを必ず見ている。星座占いでは、蠍座は色恋にたけていると良い事としか書いてないので、年頭の励みになる。色恋こそは人生を彩り、操る重大事だ。最近、ついに『3年の星占い蠍座』という本まで買ってしまった。

さて、ポンちゃんは幻の老舗和菓子屋文福洞三代目の若旦那だったかもしれない。若旦那は放蕩息子と相場が決まっているので、ポンちゃんも子どものころは恋多き人生を送っていた。なにせ、生母は四姉妹だったので、生まれた時から女性に囲まれていたのである。幼稚園の頃は近所の秋ちゃんや夏ちゃんとままごと遊びをしていた。小学校の頃も、勉学に励むことは微塵もなく、繁ちゃんや大川君らとつるんで、石垣に囲まれた自宅の樹上に砦を造り、近所の男児たちとのけんかに明け暮れ、片手間に庭石の中の結晶発掘や花壇づくりに興じていた。いまだ放蕩息子としてはおくてで、色恋にはあまり目覚めていなかったのだ。

ところが、初恋は中学校3年生の時に突然やってきた。パトラちゃんに巡り合ったのだ。恋は盲目だから、絶世の美女クレオパトラの再来かと想いを募らせたのである。本当はクレオパトラのような髪型であったので、パトラちゃんとも呼ばれていたのだ。彼女は活潑でスポーツ好き、ポンちゃんは子どもの時から地味で、鈍くさいので、恋のライバルは親友の山崎君であった。彼はスポーツ万能で、クラス代表で水泳大会に出て、クラスの女子の憧れの的になった。このため中学校での初恋は秘めたままにせざるをえなかった。しかし、山崎君は故あって、一年余り、名古屋に転校してきたが、卒業前、すぐに大阪に引っ越して行ってしまった。

ポンちゃんは高校に入ってラグビー部に入ったので、奥ゆかしくも、彼女の通う別の高校まで早朝トレーニングと称して走りに行っていた。ひそかな想いは募るばかりであったので、見るに見かねた親友の河田君が大いに気を利かせ、ポンちゃんのために、中学校の同窓会を明治村で開催してくれたのである。もちろん、パトラちゃんも参加していた。ボートにポンちゃんが一緒に乗って二人だけになり彼女に初恋を告白できるように取り計らってくれようとしたのである。ところが、河田君とカップちゃんはしとやか美人の岩山さんこそが、ポンちゃんのお目当てと勘違いして、ボートを池に漕ぎださせたのであった。高1同士で、二人ボートに乗るなんて経験は初めてで、ドキドキしながら、無口のポンちゃんはほとんど会話をしなかったのだろう。優しくも勘の鋭い岩山さんには、心の中をどうも察知されてしまったようだ。

ついに、意を決して、恋文をしたためたが、もちろん返事はない。一方的な想いを諦めきれずに、大胆にも、彼女の家に行き、面会を求めた。すると、パトラちゃんの兄貴が出てきて、高校1年生のポンちゃんに言った。「東大に入らない奴は人生の落伍者だ。東大生になってから、出直してこい」。兄貴は、桜山中学の先輩で、かなり優等生であつたらしい。無粋なことに、恋路は邪魔されたのであり、初恋は陽の目すら見ないうちに、実に惨めな失恋に終わったのである。「豆腐の角で頭を打って…（穏当ではないので省略）」である。ポンちゃんはおバカだけれども、誇りは身の丈程度には高いので、恋路を邪魔した「東大」には決して入らないと、この時に受験教育と東大に対して終生の敵意を決意した。もちろん

ん、信念を貫いて、実際にこの大学に入学しようと受験したことはない。ただし、長ずるに及んで、何人も友人・知人がいたので、大学構内には頻繁に入ってしまったが、…。

初恋は稔らないと言われているように、大失恋の顛末に至った。色恋が人生の重大事であることに目覚め、園芸部の先輩女子方に恋心を卑下するものではないと励まされた。もちろん、放蕩息子として色恋多き人生を送らねばならない運勢にあった。いくばくもしないうちに、ポンちゃんは新たな恋を得て、逞しく立ち直ったのである。まあ、「万事塞翁が馬」、人との出会いは行きがかりを大切に温めることかな。大失恋から学ばなければ、本当の恋愛が何か、考えもしなかった。人生で恋愛は美しい命だからね。

「命短し、恋せよ、乙女…（ゴンドラの唄）」、「妻をめとらば才たけて、みめ美わしく情ある。友を選ばば書を読み、六分の俠気四分の熱…（人を恋うる歌）」などの歌の通りだ。若者だけでなく、人皆、美しい恋をせよ。明るく、純愛を育ててほしいね。ポンちゃんはどちらか言うと、私小説より白樺派が好きだからね。



写真：大学ラグビー部のコンパ集合写真、この頃は精悍だったポンちゃんは後列左にいる。

第4話 学大探検部を創る

ほんとの順番では、大学探検部を創りたくなかった前史を先に書きたいのだが、創立40周年記念の第35回環境学習セミナー案内に合わせるために、学大探検部の創立者の真情吐露を優先することにした。長嶋茂雄はかく語った、「巨人軍は永遠なり」。同じく、学大探検部伝説のコンちゃんも語った、「学大探検部は永遠だ」。しかし、最近では学大探検部栄光の歴史を知らず、歴史的経験から学ばない若者ばかりになってしまっていて、「永遠」が危うい。このことを憂えたポンちゃんは生前遺言を勝手に書いておく。人生は相応に歳を重ねてしまえば、あまりに短く、もう限りがあるので、「永遠」という想いには深い意味を感じてしまうのだ。

ポンちゃんは、1974年に学大に助手として就職した。学生結婚は認めないと義父に言われたので、博士課程進学はやめて就職し、同時に結婚した。しかし、指導教官たちからは坂道を上るための重荷を与えられていた。「日本の農業教育を再建せよ」とか「骨を埋めるつもりでやれ」とか、である。根が気弱なポンちゃんは、本気にして、真面目に人の倍以上働いたが、このことは別に明かすことにする。

とにもかくにも、学生運動や公害反対活動に親しんでいたのも、学生側から教職員側に立場が変わることにはかなり緊張があった。しかし、この当時までには、悲しくも権力に負け、追い詰められたとはいえ、それでも許しがたい出来事が学生たちによってしてかされ、学生運動は信頼を失い、おおよそ潰え去っていた。学生は恐るるに足らず、まったく元気がなかった。だが、ポンちゃんは新たに大学探検部をつくるという希望を見だし、世界に飛び出す志に燃えていたから、しばらくして体験した性善説を揺るがしたほどの「いじめ」もたいがい平気でいられた。

阪本先生と穀菜食による長寿で有名な上野原町桐原に行き（1974年秋）、ここをフィールドと決めて野外調査の練習をせよと教唆された。そこで、「自然誌研究会」を創って、学生たちを募って調査するとお答えした。それなら、「自然文化誌研究会」とした方がよいと助言された。これが、東京学芸大学探検部の一源流になった（1975年春）。学内に募集のポスターを張り出し、現代表理事の中込メさんら、男性1名、女性3名、うち3名が理科学、1名が音楽科生であった。すぐに学生会員も増えて、上野原町から奥多摩町まで雑穀栽培を中心に、文化人類学的な調査の練習や登山の練習をした。

しかし、2年ほどすると、ポンちゃんは研究発表にあたって、実質のない共同研究（共著）を拒否したので、職場でいじめ（今でいう、忌まわしい用語パワハラ、アカハラ）に合い、助手ゆえに、「サークルの顧問はできない。学生と関わるな。」などと圧力をかけられた。ポンちゃんは、このいじめに屈して、自然文化誌研究会の顧問を、上司、原沢先生に依頼したのである。

その後、いじめに同情した教授たちが、いじめ上司が海外留学でいない隙に、お情けで講師に昇進させてくれた。これによって、ポンちゃんは学生サークルの顧問になる資格ができ、改めて、自然文化誌研究会の顧問に復帰したのであった。この頃には、ポンちゃんは他大学の学術調査隊員としても、インド亜大陸などに出かけるようになった。一方で、国内では関東山地調査から、北海道の北方農耕文化調査に新天地を求めて行くことになった。写真はポンちゃんの愛車スカイラインで北海道を3000kmは走った時の様子である。柴田さんや河口さんがいる。

この時期には、現副代表理事の中込ミさんらが塚原さんらと冒険探検部（もう一つの源

流)を創っていた。同じ志の若者たちが集まろうと小林君や宮本君らが合同の話し合いを続けて、東京学芸大学自然文化誌研究会冒険探検部、略称学大探検部になった。こうして学大探検部は黄金時代を迎えたのである。創部 15 周年記念シンポジウム「風と人と」には、JT クロスカルチャー大賞による中央アジア学術調査の報告をするとともに、多くの大学探検部の参加を得た。写真は、北岳に山岳トレーニングに行った時の集合写真である。現副代表の中込ミさんや小川さん、初代事務局長の小川夫人(当時リーダー)も写っている。

学大探検部の卒業生の多くは、塚原さん、小西さんはじめ、海外で働いた人々が多い。ポンちゃんが密かに夢見ていた「海援隊」が学大探検部で実現したのかもしれない。



写真：上は北海道調査、下は北岳登山

第5話 人生を旅に過ごす

ポンちゃんは肌の感光性がよく、すぐにコンガリと日焼けするので、子どもの頃、クロンボと呼ばれていじめられました。クロンボというのは新大陸の黒人奴隷や暗黒大陸のアフリカの先住民を差別する表現です。〔注：この頃、社会科ではこのように習っていた〕まだ敗戦直後のことだったが、アフリカ系アメリカ人を差別することで、日本人であるポンちゃんを二重に差別したのです。もっとも、中学生になってちょっと学校の成績が良くなったら、曾長に昇格しました。だから、ポンちゃんは差別と偏見に敏感で、とても嫌いなのです。シュバイツアー博士のようにアフリカに行って、地域の人々とともにボランティアで働きたいと志を立てたのは、差別と偏見への強い反感であったのかもしれませんが。一方、長ずるに及んで、海外調査に出かけるようになると、小麦色の肌と容貌ゆえに、それぞれの国々の人々になじみ、ありがたいことに親しく付き合ってもらえて、調査はしやすく、また、観光地でも土産を買えとか強要されず、危険な目にも余り合わないで済みました。フィールド研究者としてはありがたい肌色の形質であったのです。

人生は良く旅に例えられます。偉大な宗教者も芸術家も、フィールド研究者も、旅を重ねて思想や作品を深め、高めていった人は少なからずいます。臆病なポンちゃんも晩生でもあり、子どもの頃は近場で遊んでいました。大学生の後半になってやっと、阪本寧男先生に弟子入りしてからは、国内外で雑穀調査に従事するようになりました。

さて、先日、第35回環境学習セミナー「学大探検部の40周年記念」でお話することで、ポンちゃんの冒険・探検とは何かを振り返って考えてみました。次表は冒険・探検の内容分類を示しています（『自然と文化』第5号、1985）。この表にはさらに「開発援助」と「教育・学習」を加えることにしたいと思います。

冒険探検の目的内容

冒険／探検は人生の道草 目的らしいものの分類

- | | |
|--------|-------------|
| ・ 経済 | 金儲けの種探し |
| ・ 軍事 | 戦争の手伝い |
| ・ 学術 | 調査、研究材料を探す |
| ・ 宗教 | 布教、修行、経典を探す |
| ・ スポーツ | 心身の楽しみ |
| ・ 観光 | 物見遊山 |
| ・ その他 | なんとなく放浪 |



- | | |
|---------|-----------------------|
| ・ 開発援助 | 経済、軍事、宗教などほとんどを多角的に含む |
| ・ 教育・学習 | 地理、歴史、自然など、環境学習 |
- 写真：ナガ族のお姉さんとヒマラヤ

厳密に言えば、冒険と探検とは主目的が異なりますが、本来、冒険・探検は個人の内発的意思で行われるのであって、外発的に権力者に強制されて行うことは好みに合いません。自らが苦勞してこそ、達成した時に心身の充足があります。金儲けの経済、植民地支配の軍事に関わる探検は外圧によること大で、宗教は内発的でもあります。ある面では経済・軍事の手先にもなり得ます。なにせ、探検には旅費がかさみますので、どうしても有力者

の支援を仰ぐことになり、パトロンとの癒着が起こります。他方で、学術やスポーツ、観光やなんとなくの目的意識は内発的な冒険・探検につながるのでしょうか。開発援助や教育・学習も、地域の人々や個人の内発性に対する支援、相互学習であってほしいのですが、外圧的な強要援助あるいは植民地経営につながる可能性もあります。

若いころの、ポンちゃんの冒険・探検の主目的は学術調査でユーラシア大陸を自動車で走り回りました。しかし、このところ自由な身の上になり、身の程をわきまえてヨーロッパの観光（物見遊山）に主目的が移りました。大聖堂、美術館、博物館、植物園、大学などを訪問して、本物の遺物や絵画などを見て、郷土料理や地酒を楽しんでいます。でも、昨今、世界が騒然としてきたので、観光旅行にさえも出にくくならないとよいがと、とても心配です。それでも若者たちは気を付けて冒険・探検の旅には出ましようよね。人生は旅の出会いによってさらに彩り豊かになります。

今、改めて『秘境ブータン』中尾佐助著を読み直しています。の中には、今西学派の面々が多く出てきます。今西錦司、桑原武夫、川喜田二郎、本田勝一（当時、学部生）らの諸先達です。戦争前後のこの時代には、まだ地理的空白地帯、秘境があり、とてもわくわくするような探検旅行記です。本田勝一さんは日本での大学探検部の草創期の人なので、ジャーナリストとして膨大な著述がある中でも、ぜひ、『ニューギニア高地人』、『アラビア遊牧民』などは読んでいただきたいと思います。巻末の解説は中尾佐助と桑原武夫が書いており、冒険探検について意見を述べています。一度、15周年シンポジウムの際に、本田勝一さんに講演を依頼しましたが、残念ながら諸般の事情で実現しませんでした。かれは、ポンちゃんの先生の先生である木原均を慕って大学を移籍したそうです。{注：ここでは、偉い人の敬称は先例にならって書きません。ごめんなさい。}

第35回環境学習セミナーの発表を聞いて、学大自然文化誌研究会冒険探検部（学大探検部）は「すごい」活動実績を蓄積してきたと、ポンちゃんが関係当事者でなければ、自画自賛ではなく、本当に手放しで賛美したでしょう。特に日本とタイでの冒険学校の継続は素晴らしい経験の蓄積です。昨今、名利を求めて、猜疑保身を図り、口先ばかりの世間であって、ひたすら地道、寡黙に実行してきたから、地域住民・協力者の信頼を得てきたのだと思います。

ポンちゃんは直情的で、すぐに感情を顔に出すし、頑固一徹で直進する、すなわち、大学院生の頃は指導教官の花田毅一先生に無闇に実検するがむしやんな猪武者だと酷評され、環境教育学会を創った頃は谷口文章先生に猪突猛進の重戦車だ、と言われました。あるいはおっしゃる通りで、子どもっぽく突っ走って周囲の人たちをたくさん傷つけていたのかもしれない。しかし、ポンちゃん自身は人の意見をよく聞いた上で、判断と責任を自分で取ってきたのだと思っています。

ひるがえって、自然文化誌研究会 INCH の人々は名利を求めず、行為がゆっくりで、時として温厚さがもどかしくて仕方がないのです。でも、重戦車の猪突猛進の緩和・中和剤として、活動の結末のソフトランディングを助けてくださったのでしょうか。学大探検部40年を振り返ってみて、彼らと終生の友人として過ごせて、とても感謝しています。環境学習セミナーには30名ほど、翌日の INCH 祭りライブにも30名ほどが参加したようです。旅をして、キャンプで同じ釜の飯を食べたメンバーに、久しぶりに会えてご同慶に堪えません。やっと印刷され、幻に終わらなかった『冒険と子どもたち』を一読して、本会がさらに冒険・探検活動を展開して、50周年を迎えられることが確信できました。

この2回は、ちょっと真面目な文体になりましたが、次からは元に戻します。

第6話 二言で世界を渡る法

冒険探検で世界各地あるいは日本各地を旅行して回るには、その土地、民族の言葉あるいは方言をできる限り覚えなくてはなりません。でも、ポンちゃんは言葉の習得が苦手で、まことに「困ったちゃん」です。人類学者たちは、調査地に住み込んで、住民の後を追いかけてながら、まず地方語を覚えます。植物学者は中尾佐助先生がおっしゃったように、観察、採集が主要な仕事ですから、あまり定住せずに、旅行して回りますので、言語習得はおぼつかなくても何とかします。でも住民の暮らし振りには深入りできませんので、住民も含めてそのフィールドを統合的に理解するには現地語の習得なしには、あまりにも不足です。なぜ、習得が苦手かと些末に及んで原因追及を試みました。

1) 人見知りと無口

今から思い出せば、ポンちゃんは子どものころから人見知りが強く、恥ずかしがり、無口で、自らはほとんど話しませんでした。いつまでもいじけてはいけない、無口を返上しようと思い、高校生の時には意を決して生徒会役員に立候補してみましたが、あっさりと落選しました。このままでは悔しいので、次の機会には敗者復活で懲りずにまた立候補しました。1600人ほどの生徒や先生の前で演説するのはとても緊張します。そこで、おそまつ君の漫画を演説原稿に張り付けて、緊張をほぐしました。「また性懲りもなく立候補した」などと言ったら今度は結構受けて、先輩女子高生から「かわいい」と大好評で、高得票で当選しました。

2) 耳の発達不足

子どもの頃、まともな音楽を聴く機会がなく、父が珍しくプレーヤーとレコードを買ってくれたので喜んだ束の間、「私のラヴァさん曾長の娘」なんていう曲が流れて、がっかりしました。中学生の時には、音楽のペーパーテストは満点でしたが、通信簿で5がついたのは1回しかありませんでした。悔しいというよりも、自分が上手に歌えないのはつまらないです。裕福なうちの同級生たちは、交響曲だの、ベートルズだの聞いていました。当時、流行っていたのは、中尾ミエの「可愛いベイビー」など……。子どものときから良い曲を聴いて、耳を慣らさないと、だめだったのですね。ドラえもんに出てくるジャイアンのように、ちゃんと歌っているつもりですが、どうも音程が不安定です。しかし、大人になってからも、自動車を運転しながら聞くのは、昼間は荒井由実、夜は中島みゆきとかの難しい歌で、車中で一緒に歌ってはみるのですが、自分で聞いていても、だいぶ外れています。

探検部員だった河口君の結婚式に出て、酔ったうで無理やり歌わされた際には、実に申し訳ないことをしました。ジャイアンのまねがあまりに上手だったので、学大の音楽科には生徒を入れない方が良くとまで褒められました。音楽科の諸先生方に申し訳なかったです。そういえば、高名な声楽の先生と懇親会の幹事をしたときは、体中が縮みあがりました。歌を歌わせられるのは、真っ平にご免だったので、落語を暗記して演じ、難を逃れました。

3) 興味に我を失い、集中しない

本当は言葉の習得が苦手という以上に、同じことを繰り返すことが嫌で、怠け者なんだ

と思います。ちなみに親友は毎日、NHK ラジオの英語プログラムを何はさておき聞いています。テキスト代は千円程度です。ところがポンちゃんは、英語は中学校から習い、仏語は大学教養部で成績「優」、独語はこの親友に通信教育で習って、博士論文の試験まで受けました。峨眉山調査計画のために中国語は王先生から、中央アジア調査のためにロシア語はモスクワ大学に留学した東京外国語大学の院生から、ラジャバト・プラナコン大学大学院で集中講義するためにタイ語は留学生のアンカナさんから、インド亜大陸の旅行記を書こうとヒンディー語も東京外国語大学の院生から習いました。ラジオもロシア語などは、初めのうちは少し聞きました。言葉は、毎日、反復練習をし、現地の人々との会話で実際に使用しないと、習得できません。しかし、お恥ずかしながら、習得に専念せず、興味を好きなことばかりにかまけて、言語習得に集中せずに、今さら、反省してもダメなのですが、何語をもものにしていないのです。それでも生きているうちに、サンスクリットをかじりたいと辞書は買いました。ちなみにラテン語はじめてたくさんの辞書をもっています。辞書さえあれば、要約くらいは何とか読めます。

4) 日本人の舶来尊重

日本人が多数で、国際会議などをすると、「発音が悪い、綴りが違っている」など、事細かに批評されるのです。日本人に小うるさく言われるのが嫌で、口をつぐんでしまいました。実際には、ちょっとくらい違っていても、黙っていてまったく意思疎通できないより、ジャングリッシュでちっとも構わないと思いますので、口を開けることです。例えば、オーストラリア人だって、today を“ツダイ”というので、どうして「死」ななければいけないのかとびっくりしました。ウズベク人は girl を“ギョル”というので、どうして「魚」なのか、これまたびっくりしました。中学の英語の教科書 “Jack & Betty” では can は“カン”と聞こえていたのに、教科書がすぐ変わって“キャン”と聞こえ、しばらく切り替え困難でした。

さて、いくつも言い訳を並べましたが、ポンちゃんはとても恥ずかしながら、つたない英語で世の中をやり過ごしました。長らくインドにいたのですが、多言語のこの地域では、ヒンディー語、ウルドゥー語、ネパール語、シェルパ語、カンナダ語など、…何もかも片言だけで、結局はずばらして、インド人同士でも共通に通じる英語だけで済ませてしまいました。インド亜大陸を旅行していたら、ヒングリッシュの早口で語尾の“r”が強調されるので、聞き取りにくかったのですが、慣れればお互いにおおよその意思は通じます。

しかし、読者の皆様は大人になってから、どうかまじめに多言語の習得に努めてください。子どものときは、まず日本語をよく覚え、日本語で考えることができるようにしてから、外国語を学んだほうが良いかと思います。幼児から英語を学ぶのには疑問があります。私たちは日本人ですから、母語を大事にしたいです。ポンちゃんの意見では説得力が弱いでしょうが、多言語を操るかの親友も同意見です。いくら英語が上手にできても、日本の総理大臣は国連では日本語によって演説していただきたいです。また、英語が世界唯一の共通言語というわけでもありません。スペイン語や中国語も話者は多いです。

さて、本題は最後になりましたが、二言で世界を渡る法を述べます。それは、「こんにちは」と「ありがとう」です。どの民族言語においても、お付き合いはこの2語で終始します。この二言を言って、ちょっとニコリとすれば、初対面でも緊張が解けます。ずぼらなポンちゃんは、たくさんの言語でこの二言だけは言えます。これで、ちょっと大変だった

けれども、何とか楽しく人生を渡って来たんです。本誌『ナマステ』はインドやネパールで大方通じる「こんにちは」という最初の挨拶です。暖かくなったら、また旅に出かけましょう。

民族植物学会の年会に参加するためにイギリスのパスに行ったので、近隣の街トットネスに寄りました。ここはトランジション・タウンの発祥地ですので、小金井に住んでおられたシェファードさんの事前の紹介で、街中をジャイさんに案内してもらい、自転車修理ボランティアの Dr. バイクにも会いました。エデン・プロジェクトはイギリスにおけるミレニアム・プロジェクトの一つで、エンタテイメントの植物園ですが、世界の雑穀も含めて、多くの栽培植物を保存しています。年間 200 万人以上が訪れます。



写真：左はトットネスの Dr. バイク、右はエデン・プロジェクト。

第7話 学術探検の道具

植物と人々の博物館の特別展示では、ぼくの国内外における野外調査での植物採集道具などをお見せしています。小菅村の井狩バス停近くの植物と人々の博物館に、一度見にお越しください。{注：道の駅を下って幹線道路に出たところの倉庫}

1) 調査バッグの中身

野外調査でいちばん身近な道具はデイバッグです。雑穀研究チームなので、millet 社（フランス語ではミレーだが、英語では雑穀の意味）のものを愛用しています。機能性も良いのですが、millet であることにより意味があります。このバッグの中には、調査行動に必要ないろいろな道具を入れています。

カメラは2台持っています。景観や植物などを撮影するためには、ニコンの一眼レフ F2 フォトミックを使ってきました。就職したてに、高くても買えなかったのが、先に就職していた妻女にボーナスで買ってもらいました。高山、砂漠、熱帯雨林、ラフロードなど、どこでも信頼を裏切らずに、綺麗な写真記録を残してくれました。本体は岩やジープなどあちこちにぶつけて傷だらけですが、1 回オーバーホールしただけで、今でも使用できます。ただし、ボタン電池なので、新宿駅近くの中古カメラ屋で電池は買わなければなりません。現在は、ぼくも残念ながらデジタル化に負けて、キャノンの一眼レフ EOS-Kiss を使っています。もう一台は、調理や人物を一瞬で手早く撮影するために、ハンディなオートカメラを使いました。アサヒペンタックス、キャノンオートボーイ、最近ではキャノン IXY、どれも荒い使用に耐えきれずに、すぐに壊れて、それぞれ 2~3 台ずつ買い換えました。こうしてみると、ニコン F2 は最高のカメラでした。フィルムは植物や景観撮影用にコダクローム ASA64、および調理用撮影用にコダカラーASA100・400 およびモノクロも著作の印刷写真用に、目的によって各種使いわけていました。カラー印刷はとても高かったからです。

調査記録のためには、野帳スケッチブック、ボールペン、シャープペンシルなど、必要に応じて名刺も英語版で作っていました。スケッチブックは方眼紙なので、地図を描くのに便利です。手ごろな薄さ、大きさで、規格もそろい、使い易いです。

植物採集のための用具は、根ほり、剪定鋏です。特に根ほりは場合によっては護身用武器になります。もちろんこうした目的には使用しないで済みましたが、ちょっと危ないこともありました。植物やその種子を採集するために、竹製野冊、収穫袋、種子袋、ビニール袋、これらに書き込み記録するためにマジックインク、袋を封じるホッチキス、針を持っています。いずれも予備が必要です。収集種子は変異個体を区別して収集し、また現地共同研究機関と折半するので、収穫袋（パラフィン紙製）、種子袋（丈夫な紙製）は千枚単位で持参しています。

ちなみに、植物展枝・乾燥用には現地で古新聞を買います。しかし、古新聞は包み紙にするなどの用途があり、なかなか入手困難な場合があります。長期にわたって、高温多湿地域を調査する際には、植物標本はビニール袋に入れて、エチルアルコールを加えて封入します。イスラムの国ではアルコールは禁止なので、入手困難です。アルコールが切れるとカビが生えて、標本を捨てることになります。乾燥地ではできるだけ新聞紙に挟んで乾燥させます。すべて移動中に行うので、朝夜と梱包作業に時間がかかります。

測定用具は定規、メジャー、高度計、方位磁針、野外活動用時計などです。聞き取り調

査や行動中の記録を録音テープまたは IC レコーダーに吹き込みます。しかし、調査後にテープ起こしをする時間が取れないことが多いので、できるだけ、野帳に記録することになりました。揺れ動くジープの中で、字を書くのは困難で、後で見て、自分の字ながら読めないこともあります。地図はとても重要で、日本でドイツ空軍制作などのものを購入していました（GPS はありませんでした）。また、現地でも購入しました。ただし、地図は軍事に関係するので、気をつけないと怪しまれます。空港でカメラを使用すると、フィルムは没収されました（今はめったにないですが）。日時場所を行動中に記録し、その夜のうちに行程を地図上で確認しておきます。どこで何を採集したかの記録は重要です。

ヘッド・ランプは早朝、夜に必要です。自動車のランプが壊れて、雨の夜にヘッド・ランプで走ったこともあります。小傘も欲しいです。財布、時計、パスポートは常時無くさないように身に付けています。

2) 調査資材や生活用品

資材は、調査用紙、野帳、カメラ 2 台、乾電池各種、録音テープ、写真フィルム各種、ルーペ、さく葉標本乾燥用古新聞紙、標本保存用のアルコール、防虫剤、蚊取り線香。熱帯病医薬品は日本製を持参するが、抗マラリア薬、スポーツド・リンク 粉末などは現地の薬局で購入します。耐性マラリアには日本製のものでは効かない場合があるので、現地製のものと交互に飲みます。生活用具は軽登山靴、サンダル、アルコール・コンロ、コップ、ナイフ、ヘッド・ランプ、シェラフ・カバー、防蜂網、裁縫用具、封筒、報告書用紙、電卓、辞書など。生活用具はできるだけ現地バザールで購入します。寒い高山ではシェラフを、暑い低地ではシェラフ・カバーを使います。登山靴は汎用のために、軽登山用が良いです。宿泊時には素足、サンダルが便利です。嗜好品は、ウイスキー、タバコを免罪店で購入して持参します。禁酒法があったり、飲酒の習慣がなかったりで、現地調達ができません。長い夜に疲れた心身を安らげるには酒が必要です。タバコは村人や運転手と親しくし、休息のために一緒に吸います。パイプ・タバコやビリも時々吸いました。

セミナーなどで、調査研究について話すことを求められるので、35 mm スライド、論文別刷（USB や DVD はなかった）を持って行きます。

調査旅行は数カ月に及びますので、スーツ・ケースには、旅行用品、調査用品（フィルム、野帳、収穫袋、ビニール袋各種）、医薬品、衣類などを入れています。小旅行用には登山用ザックを使用します。帆布製の信玄袋は収集した種子や植物標本を運ぶために持って行きます。ブリキ衣装缶はバザールで購入し、収集種子や植物標本を入れて、別送品で日本の港湾の植物検疫所に送るために使います。

＊ 調査で収集した、植物標本、写真記録、音声記録、民具、書籍、調査票、報告書などはすべて、植物と人々の博物館にアーカイヴとして整理して、残しますので、ご利用ください。なお、収集種子は東日本大震災時の計画停電、放射性物質汚染を避けるために、すべてイギリスの王立植物園キューのミレニアム・シードバンクに移管しました。ごく一部をローカル・シードバンクとして、トランジション・タウン藤野のお百姓くらぶに移管しました。農業生産法人藤野倶楽部の無形の家種子保存冷蔵庫 2 台、森とむらの図書室藤野分室（農林業書籍 1500 冊）を置かせていただいています。また、JR 中央線藤野駅のホームの北側に畑もお借りして、日本村塾自給農耕ゼミ、雑穀栽培なども開催しています。



写真：道具展示。地球外生物 ET は 3000 歳の若い植物研究官で、ミレニアムごとに地球の植物をモニタリングに来ています。ごみ処理ロボット WALL・E が地球に残り、植物を育てたので、人類は宇宙から帰還して、再び農耕文明を始めました。ナウシカは腐海の謎を知ったが、トルメキア戦役が終わってからは風の谷に帰ったとも、森の人の元に去ったとも伝えられています。

第8話 やっと間に合った男の後塵

牛の蹄のあとの水たまりの中にとじこめられ、
また彭祖のような長寿をもたぬわれわれには、
景きな風に乗って疾やかに天空を遊行し、
神馬をかけて遐かな土地を観るすべもなく、
ただいたずらに日月星辰をながめやって、
思いを大地の八方の果てに翔けらせるだけなのである。
(魚叅 AD3C?)

歴史を探ることは郷愁ノスタルジーからではないと思います。古今東西の正史というのは、大方、英雄伝であって、大多数の庶民の生活誌についてはほとんど書かれてはいません。たとえば、『三国志』（陳寿 AD3C、今鷹・小南訳 1993）を見ると、「魏書」もほとんどが英雄伝です。当時（弥生時代末から古墳時代初）の「地理的日本」については「烏丸鮮卑東夷伝」の一部「倭伝」に記述があります。やはり大方は諸小国についての記述に費やされていますが、少しだけ、「禾稻や苧麻を植え、蚕をかってそれを糸に紡ぎ、・・・倭の土地は温暖で、冬夏にかかわらず、生野菜を食べ、誰もがはだしである。・・・」など生活誌の記述があります。ちなみに、禾稻を訳者はイネとしていますが、禾は本来、アワのことなので、アワとイネを栽培していたということです。{注：「魏志倭人伝」は『魏略』（魚叅）による。} 日本で最も古い水田遺構のある菜畑遺跡（佐賀県唐津）も、丘の畑ではアワを栽培していました。

そこで正史英雄伝ではない個人史の意味は歴史的に庶民の生活誌を継承するうえで、大切なものであると思います。しかし、これまでの経験からして、個人というものは自己中心的にしか物が見えないようです。もちろん例外的に、広い視野で深く洞察できる人もいないわけではないですが、・・・。

たとえば、大学勤めをしてきて、学生の皆さんの自然体験について 40 年間にわたって問うてきました。彼らはおおよそ 1956 年から 1996 年ころまでに生まれた人々です。この間に日本国は「高度経済成長」を遂げた後、「バブル経済」が崩壊するに至りました。自然環境は経済成長を支える開発によって著しく荒廃し、また、都市化の進行で一層人々の自然離れが進んできました。生活誌が大きく変化したと考えられる期間です。

それにもかかわらず、年ごとの学生の皆さんは同じように、「自分の子供時代は自然があってよかったが、今の子供たちは自然の中で遊べずに可哀そうだ」と意見を述べていました。自分たちはやっと間に合ったが、後輩たちは可哀そうなものだと言っているのです。アメリカはミシシッピー河のトムソーヤたちのように、敗戦後、木曾川中流で和船をこいで命がけで遊び呆けていたポンちゃんからすれば、学生の皆さんの自然体験など、あまりに細やかなことに思えてなりません。それでも 40 年間、「自分たちは良かったが、・・・」と聞き続けてきましたので、このことは大方の若者たちはまだ自己中心的にしか、経験を位置づけられないということを示しているのだと考えました。自己中心的が悪いと言っているのではなく、まずは視野が時空間的に広がっておらず、自己の自然体験の位置づけが狭すぎる点で、個人的体験の学習に問題があったのではないのかということです。

一方、別の見方をすると、後塵を拝し、間に合わなかった人々はどうのように感じ、考えているのでしょうか。ポンちゃんの老師阪本は、自分は消えゆく雑穀に「やっと間に合っ

た男」だと言いました。別の老師降矢は、自分は「最後の山村農」だと言いました。悲壮感、ヒロイズムなのか、督励、遺言なのか、老師たちの言葉に棘はないのだと思います。ポンちゃんは彼らの弟子として、学問と山村農を継ぐ者と自らの人生を律してきました。でも、間に合わなかったと断じられては続く我らに存在意義がなくなります。我らは縄文農耕や生業の知識と技能とともに、いわば黙殺、抹消されてしまうのでしょうか。稲作が弥生時代に伝わったのがこの地理的日本の農耕の始まりだという仮説が、縄文遺跡からの栽培植物の発掘を否定し続けてきました。

しかし、佐々木高明先生（2013）が書いておられるように、考古学者や日本民俗学者による仮説訂正は何の言い訳もなく、今日ではいつの間にか縄文農耕はおおよそ常識となっています。仮説は新たな研究成果によって、改められていくものですが、それは事実に基づく情理に沿うべきです。縄文遺跡から雑穀、豆、麦などが発掘されるばかりではなく、現在でも雑穀は山村の篤農によって細々とはいえ栽培され、生き続けている、この事実を継承することが重要なのです。ところが、このくにの人々は生業に伴う伝統的知識体系、生物文化多様性の技能について、失ってはならないこととは思っていません。誠に残念で、悲しいことです。

このように、栽培植物の在来品種も、我らマイノリティも少数民族も消されまいと、現代世間に抗っているのだと思います。また、冒険者とはこうした抗う者たちだと思います。たとえ間抜けな人間と言われようと、間に合います。自ら学び、千年先を直観して、今、為すべき、かつ、できることを後世のためにしておきましょう。私たちの想いは時空を超えて巡らすことができます。優れた冒険家たちの「カリバー旅行記」「ユートピア」「すばらしい新世界」「1984」などを読み、ポンちゃんも「生き物の文明への黙示録」を綴っています。正史だけが歴史録ではなく、個人史を記録しておくことは、自己にとっても社会にとっても大事なのだと思います。

常に庶民を消し去ろうとする争いの時代から、趙行徳が敦煌の莫高窟に書籍を守った行為に習って（井上靖小説）、この地の生き物に関わる生業文化を保全、継承したいと強く意思します。AI ではなく人類の想像力 SSF(Social Science Fiction)に希望を託します。たとえ、我らが忘れ去られようとしても、植物は創造的進化を止めず、一等植物研究官 E. T. やごみ処理ロボット WALL-E は千年紀を超えて植物文化をファンタスティックに復活させてくれるでしょう。



写真：上は、岡部さんが保存している雑穀在来品種の種子に見入る冒険者たち。下は、ポンちゃんが失敗した陸稲畑。雨ばかりの夏で雑草を取り切れず、陸稲（手前）の生育が貧弱、出穂アワ（真中）はこぼれだねから生えた。

第9話 キビに魅かれて文明の十字路へ

キビの栽培化起源の地は中央アジアからインド亜大陸北西部であるとの仮説を、阪本老師が唱えたがために、ポンちゃんは中央アジア内奥に行くことを願望し始めた。いいよね～、莫高窟の敦煌や流砂に埋もれた楼蘭、ウルムチやトルファンのもっと更に先、ウイグルなど遊牧民族の草原と砂漠の世界、太陽の国ホラズム…。探検への憧れ、血が熱くなってくるよね。

今から20余年前（1993）、憧憬が現実となった最高の探検旅行の日々での、多くのシーンを鮮やかに思い起こすと、自賛で手放しについ顔がほころんでしまう。砂漠の熱さに生きる実感があつた。ガンガの蒸し暑さとは違う、むしろ心地よい、乾いた熱さだった。詳細な事実の旅行記は改めて書くことにし、ハイライトのみを脚色して、夢の日々の思い出を語りたい。

サマルカンドのバザールでは、シャシリクの焼ける匂い、ハミウリの甘ったるさ、ラグマンの油の味、プロブの丸ごとニンニク、ジャガイモとよく合うディルが好きになった。今ではキュー植物園で購入したディルを毎年、ベランダで育てている。

中央アジアハイウエーの路側、ポプラ並木の下で飲んだ温いピーバ {注：ビール}。トレーラーがドラム缶を大きくしたようなピーバのタンクを運び、路側に置いていく。ジョッキはコンポートの大きな空瓶だ。熱い路上で温いピーバを飲んでもうまくなかったが、ほろ酔い心地はとてもよい。反対に、歓迎会でウオッカの一气飲みには耐えられなかった。調査旅行でありながら正体を失うほどに酔いつぶされ、トイレで寝る羽目になった。そこで飲酒は隊員の当番制にした。ソ連崩壊後で、配給票がなければ庶民はウオッカなど買えないので、日本から偉い植物学者 {ポンちゃんのこと} が来たという名目で、現地ウズベクの隊員は市長からガソリンとウオッカの配給を受けた。一人一人が挨拶をしては一气飲み、10人いれば、10杯である。

キルギス大学の薬草園で野宿した時は、その香りで心身が洗われるようだった。しかし、空港免税店で買っておいたウィスキー・シーバスも一气飲みで2本がすぐになくなってしまった。ロシア語、ウズベク語、キルギス語、日本語で、インターナショナルを合唱した。ソ連は崩壊して、レーニン像も引き倒され、砂漠の民は коммунист から ислам 教徒に戻ったのだが、これだけが皆の知っている世界共通の歌だった。

ウルゲンチに行き、ヒヴァ城に泊まった。この頃は、まだ自由旅行は一般に認められておらず、インツーリストのホテル以外では宿泊できないはずだった。したがって、外国人が泊まるのは75年来無かったことで、朝帰りなど、ちょっと粋だったのかもしれない。ブハラ ミナレット（尖塔）にも登った。きつく狭いらせん階段を大股で回転しながら登るので、本当に目が回った。

ビシケクの大らかな街並み、スズカケノキ並木、乾いた空気、中央アジアにきてうれしかった。各地のバザールで、地元の産物や食べ物を見て歩くことは、とても楽しい調査の始まりだ。多様な民族の人々が店を出し、また買い物に来ている。バザールの匂い、色彩、雑踏の音、生き生きとした人々、…五感が目覚めて、輝くね。バザールでは、ノン {注：パン} を展ばす ローリング・ピン、取り出しようの厚手の手袋、ナイフなどを民具として買った。コーカンドのバザールでは、ハッとするような美少女と目が合った。彼女は小柄で、金色の装飾を施した帽子を着けていた。左右の店を物色しながらぶらついていたら、仕立屋の店先から、かの美少女が手招きしている。男心を見透かされたのかと狼狽したが、

招かれるままに店に入って、店員の女性たちと一緒に写真を撮った。写真を送る約束をして、住所・氏名を書いてもらったので、日本から送った。今となってはウズベク語かロシア語かの区別もできず、彼女の名前も解らない。ペルシャ系の織姫なのだろうか、彼女は美しかった。

たった2か月ほどの調査旅行であったが、お金にはほとんど苦勞した。まず、成田空港でエクセスを支払うように言われた。ソ連崩壊後で、食糧難なので、配給票がなければ食糧は買えないので、日本から食糧を持参せよとのこと、荷物が多すぎたのである。宅配便で送り返すということで、分散して隊員の機内持ち込みにし、難を逃れた。トラベラーズ・チェックで調査費をもっていったが、モスクワに着いたらTCは換金できないと言われ、それでは現金なしと同様だ。困り果てて、後続メンバーには現金を持参するように言った。しかし、北京ホテルだけはとても悪い率で換金できるとのことであった。タジキスタンに行くと、新しい貨幣ソンが発行され、ロシア・ルーブルは使えないという。また、納得できない率で換金しなければならなかった。後に聞いた話だが、極東の某国大使はブラック市場で換金して利ザヤを稼いだという。酒を飲みながら、大使の元調理人が言っていた。このルーブルも、1990年以前の札は使えないなどと突然決められ、持っていたいくらかの札は紙ごみになった。研究所の所長は種子の持ち出しに関して多大な支払いを要求した。彼のアメリカ旅行の資金が欲しかったからである。私は、そんなに支払ったら日本に帰れないと名演技で金額を値切ったので、親しくなった研究員から喝采された。些末だが、通行税だとかお土産の関税だとか、あちこちで、公務員らから明らかな袖の下を要求された。また、抗生物質など医薬品の持ち合わせを渡すようにも要求された。ソ連が崩壊して、中央アジア諸国が独立するこの時期は、思想的価値観が崩れ落ちて、大変な動乱期であったのだろう。あくまでコミュニストという人もいれば、イスラムに戻る人もいる。中央アジアの民族史は実にダイナミックだ。

私たちはロシアのビザしかなかったが、国の転換期の空白期間に自由旅行ができた。独立したてで、ビザすら発給する体制が出来ていなかったということだ。その後、1996年に、再度、インド経由でウズベキスタンに行った。日本でビザを取っていなかったのも、ビザを得るのはとても大変であった。日本から出たところには東京にウズベク大使館はなかったので、ビザは当然取得できなかった。インドに1年ほどいるうちに、東京に大使館が出来たので、日本人は東京でビザを得るべきだという論であったようだ。ニューデリーのウズベク大使館に何度も通い、無為に大気汚染のひどいニューデリーに1週間余計に滞在した。本国に聞いているというだけで、窓口で門前払いであった。やむを得ず、日本大使館ルートで取り計らってもらい、タシケントでビザを取得した。

農民の皆様、バザールの人々、日本語学科の学生の皆さんはじめ、多くの人々に親切にしてください、無事調査旅行をすることができた。天山山脈の周辺を巡った旅行は後の研究に有益であった。キビの起源地、祖先植物をおおよそ確定できたからである。ウズベキスタンには多くの民族を出自とする人々がいる。ドイツ、朝鮮、トルコ、イラン、…。民族文化の多様性はハミウリの生物多様性以上で、まさに文明の十字路である。ウオッカ、ウイスキー、クワス、ピーバなど、酒もいろいろ飲んだ。カザフの馬乳酒は満天の星の下で野宿して遊牧民と飲んだ。ポンちゃんの楽しい人生的一幕であった。



写真：タシケント東洋大学日本語学科生とチャイハナにて（上左）、多様性に富むハミウリ（上右）、ミナレット（下左）、スタイリストと調査隊員たち（下右）。

第10話 環境教育学の創業のころ

時代をワープして1974年に戻り、30年ほどを未来（近現在）に向かって辿ってみたい。環境教育学を創生するために大変お世話になり、最も尊敬する阿部猛学長（当時）がご逝去（2016年5月26日）されたと、ご令嬢からお葉書がくしくも昨日届いた（8月）。阿部学長は助手からすれば雲上人で、めったにお会いできる方ではなく、恐る恐るお手紙を差し上げ、環境教育学の確立のために下に記すような行動をとることに寛大なご許可をいただけるようお願いした。好きにして良いとのお返信をいただき、これで小雑魚は水を得たのである。

また本日、滋賀大学の市川教授から『日本環境教育小史』をご恵贈いただいた。ポンちゃんが始めた頃には、「反社会的」と煙たがられていた環境教育も、今日では「ESD」や「ECO」となって権威づけられ、あまりにも人口に膾炙した。たくさんの関連書が出て、まことにご同慶に堪えないが、一つだけ「痴愚」（ちぐは愚痴ではない）を言っておきたい。

日本における環境教育の創業には、ポンちゃんと自然文化誌研究会の面々が事務局として重要な下働きをしたのだが、公的な文書や書籍には事実として記述されてはいない。私たちは有名有利やメディアを避けて、地道な現場実践と自律した理論構築の作業を続けているのだが、このくにでは、名利を声高に言わなければ、無名非利の任意な市民活動や調査研究の成果は世間に知られず、黙殺され、無かったことになる。たとえ一時有名になっても、学問・思想すら商品とされて、情けないことに消費され、売れ残って賞味期限が過ぎればゴミ箱に捨てられる。

私たち自然文化誌研究会の目的である冒険・探検の志は金銭で売り買いできる商品ではない。このくにの子どもたちや農山村「辺境」（実は源流）の人々に役立ちたいと自費で自律ボランティアに、自由気ままに楽しく継続してきたので、もとより有名有利を求めているから、世間に知られずとも好い。ただ、「痴愚」というのは、こうした無名非利の市民意識をこのくにの人々の2割くらいが選択共有しないと、このくにの衰退は免れないということだ。血の気が多く、悟りきれないポンちゃんとしては、ここが正直に悔しい。だから、せめてのあがきとして、非公式な事実を冒険探検粉塵記に記録しておきたい。しょせん粉塵の中に生息する一寸の虫にすぎないのだが、五分の魂はあるのだ。

さて、1974年4月から東京学芸大学職業科農学教室の助手になって、ポンちゃんの冒険と挑戦の第二の人生が始まった。中学校職業科という教科は、他教育学部では中学校技術科（工業）に大方編成されたにもかかわらず、学大は規模が大きかったので残存して、農学教室は主に農業高校教員、商学教室は商業高校教員の養成をしていた。教員免許職業科は残存していたが、すでに中学校ではこの教科は実質上なくなり、養護学校（現在の特別支援学校）にのみ、有効であった。いわゆる特殊教育・障害児教育には、農耕・園芸作業が機能改善に有効であるとするモンテソーリ・メソッドの影響が強かったからであろう。

文部省教育大学室長からは「職業科を廃止せよ」とのお達し行政指導が強くあると聞き、就職したとたん「農業教育」は不要だと冷水をかけられた。もちろん、こういう偉いお役人には学長でないと直接面会ができない。年齢も大して違わない学生たちも、役立たない職業科教員免許とこの理不尽に不満を抱いていたので、何とかしようと考え出したのが、農業を基盤とした「環境教育」であった。教授たちは不賛成、助教授たちは何とか賛成してくださったので、環境教育研究会を創ることになった。事務担当として文書の草案はポンちゃん助手がほとんど作成していた。環境教育研究会は3人の助教授が唱道して創立し

たと当時の教育新聞に載った。研究会の事務作業はポンちゃんの仕事であり、研究会の準備、雑誌の編集、経理など、ほとんどの裏方を喜んでしていた。

しかし、大林助教授から共同研究ではないのに雑草の論文を共著にするように言われて、それは科学的態度ではないので共著を固辞したところ、「助手は奴隷なので、自分の言うことを聞いてればよい。君を絶対万年助手にする」とまで言われた。性善説のポンちゃんが人生で初めて私的怒りを抱いたことを心に認めた。学園闘争を経て、大学には学問の自由、自治があると思ったかったので、この発言は気に入らず、大いに反発した。国連大学の学長になるとまで言っていた自信家の大林先輩との蜜月、信頼関係は2年で壊れた。それでも、環境教育についてセンスがないとはいえ、彼の努力がなければ環境教育研究会はできなかったもので、世間は公正に彼を評価すべきだろう。その後10年ほど、環境教育研究会の事務方は続けたが、残念ながら先細りになった。彼の功名心の強さが人々の集まりを阻害したのだから、ポンちゃんは以後心して、私利私欲と有名有利を一層戒め、裏方に徹した。志を達成するには多くの人々の助力が必要で、ほんとうに無欲でなければ、誰も援助はしてくれないことを、大学就職2年目で心にしみて学んだのである。

低迷した環境教育研究会を離れて、日本環境教育学会準備会を始めることにした。前轍を踏まないように、3年間かけて、周到に呼びかけ人を500名ほどに増やしたところで、日本環境教育学会を創立する戦略をとった。自然文化誌研究会は着実な地ならしをしていた。この間の概略史は、『民族植物学ノオト』第7号に記録してある。現在も継続している環境学習セミナー（2016年9月で第38回）は、1984年に第1回野外教育セミナーとして始めた。第4回の後、写真に示した第1回野外教育シンポジウム（1986、東京学芸大学）、第2回野外教育シンポジウム（1987、大阪教育大学）、第3回野外教育シンポジウム（1988、愛知教育大学）、第5回、第6回野外教育セミナーを挟んで、第4回野外教育シンポジウム（1989、信州大学）を経て、第5回野外教育シンポジウム・日本環境教育学会創立大会（1990、東京学芸大学）へとつなげていったのである。この間、自然文化誌研究会の会員は事務局を運営するにとどまらず、中込卓男代表理事、宮本透さん、河口徳明さんなどが実践研究の成果発表も行った。

一方で、ポンちゃんの冒険主義的戦術も併進していたのである。非公式事実として記録しておく。当時、ポンちゃんは環境教育学会を創立することに人生をかけていた。色男には金も力もないので、藁をも掴むつもりで支援者を求めている。たまたまラジオを聞いていたら、青少年団体の海野理事長が野外教育に熱心だったので協力を求め、文部省の平山初等教育局長に紹介いただいて、環境教育学会を創ることに支援をお願いした。この頃、ポンちゃんは恥ずかしながら、一世一代の大芝居で、赤坂のパブだったかで、海野理事長や平山局長と酒席を共にして、カラオケで中島みゆきの「悪女」まで歌ってのけたのである。ポンちゃんがジャイアン・レベルの音感の持ち主であることは前に述べたとおりである。

また、農村開発企画委員会の石川英夫専務理事が第1回野外教育セミナーの開催告知（たった2行程度）を新聞で目にとめられ、明峰哲夫さんの都市を耕すが話題であったので、聞きにお越しくださり、その後とても親切に支援してくださることになった。森とむらの会を創るので参加するように誘っていただき、石川さんのご紹介で高木文雄会長にお引き合わせいただいた。この時から高木先生はポンちゃんの行政学の老師となったのである。彼は大蔵次官の後、国鉄総裁など多くの役職を歴任された。もちろん自然文化誌研究会会長もしてくださった。こんな偉い方とポンちゃんが会議や研究会の後で、石橋隆明事務局

長と3人で、奥様には内緒で、親しくビールなど飲んでいたとはだれも知らないことであった。高木先生は願いを大方聞いてくださり、先生のかばん持ちということで、多くの省庁次官・長官・局長など高級官僚にご紹介くださった。無口のポンちゃんは短時間の会見で環境教育の重要性を説くために早口・多弁に豹変してしまった。平山局長は事務次官に昇進され、高木先生は彼との対談を設定して、自然文化誌研究会の活動、環境教育の必要性を話し合ってください。ところが、平山次官は国会議員に立候補するところで、リクルート事件が発覚して、これに関与したとして失脚されてしまった。他方で、木田宏元事務次官からは、学者は王道を行けとお葉書を戴いた。高木先生もその王道通りに、決して政治家には私をご紹介してくださらなかった。

しかし、この国は{注：漢字と平仮名は使い分けしている。私は日本くにが好きだが、国にはちょっと抗っている}、志を実現するためには、もちろん政治家と高級官僚の支援が必要だ。義父がたまたま建材業界団体の会長だったので、訳も解らずといっちは余りにも有り難かったのだが、娘婿のために当時の中曽根総理大臣の支援団体理事長に紹介してくれ、ポンちゃんは環境教育の大事さを申し上げた。藤川理事長は自由民権運動の壮士のよような風貌の方で、私が真摯に国事を思っていることだと快くご援助を約束してください。中曽根総理は大学（旧制高校）の先輩でもあり、ご当人もご存じないところで、多分村田秘書が環境教育の推進に手を貸してくださいだったのだろう。国土緑化推進機構の研究委員を少ししていたので、砂防会館には時々行った。有力政治家の事務所があった本館をいよいよ取り壊して改築するのか。特別会議室の大ガラス壁のレリーフは素晴らしいが、もう見ることはないかもしれない。

このような経緯で、日本環境教育学会は創立に至った。高木先生のおかげで、北山財団の助成もいただいて、準備会事務局の運営もでき、自然文化誌研究会の岩谷美苗初代事務局長、小川泰彦第2代事務局長や小松真木子さんが手伝ってください。たくさんの楽しい思い出があるが、また次号にする。このところ固い話題が続き、ごめんなさい。でも、自然文化誌研究会の誇りを忘れないために、3回は続けたい。冒険探検粉塵記はホームページでも読める。書ききれないので、そのうち、ナマステに載せない外伝も書くつもりだ。

追記：御母堂小松シズ子著（2006）『いつかまた一真木子の波音』文芸社を読みかえしたら、涙が出た。家族が一番大事だ。ポンちゃんも今では、「おとうさん、（ママの）オートション」だ。孫さえいるほど大人になった。





写真. 野外教育シンポジウム、上；正門の案内看板、中；INCH メンバーによる開会の挨拶、下；石川英夫さんの講演。

第 11 話 環境教育研究センターの創業のころ

自然文化誌研究会の皆さんの協力を得て、人知れず縁の下の作業員である事務局（企画調整）担当として、日本の環境教育学を創業したのはポンちゃんである。もちろん、世間向けに会長は偉い方々になるもので、沼田真先生にお願いした。始まりは 40 年以上も前のことである。しかし、引退して 3 年ほどたつが、いまだに数多くの環境・教育課題が解決していないばかりか、さらに深刻化しているにもかかわらず、環境・教育を学ぶ意味が深く探求されなかったことに、とても無念を感じている。意味・信念あるいは思想・信条がなければ、人の行動は浮動し続ける。外見流行と内面不易を対比させて、環境・教育関連の教育・研究組織の創業、環境教育推進法の成立の顛末を、個人史的事実として記録しておきたい。

環境教育研究センター（現在の名称）の創業にあたって、第 8 話で述べた環境教育学会づくりは戦略的な必要性によるもので、第二義的であり、本来、第一の意義は新たな学問、環境教育学の構築であった。農業教育は不要との中央政府の政策により、当時の文部省教育大学室長から附属農場（学則、学内措置）廃止の強い行政指導があった。学内からも、駐車場、サッカー場、第 2 附属高校、小金井市からは廃棄物処理場にせよとの提案が続いてきた。農業関係の諸先輩にも助力を求めたが、彼らも農業技術や行政に携わる人たちで、農業教育の必要性を認めてくれなかった。いまだに、林業関係者に比べると、農業関係者は一般教育としての農林業に冷淡だ。孤立無援であった。

そこで、農業学習を主要な基礎とする環境教育学の構築へと発想を変えざるを得なかった。農場を守るために、環境教育施設に改組する概算要求を続けた。この過程で、高木文雄先生ほか多くの方々の助力を得て、改組は認められ、附属野外教育実習施設（文部省令）が創立できた。文部省側は「環境教育実習施設」を認めず、名称を「自然教育実習施設」にするように指示してきた。抵抗の結果の妥協点が「野外教育実習施設」の名称である。その後、さらに改組拡充の概算要求を続けて、「環境教育実践施設」になった。この間、他大学では、農場から「〇〇環境教育センター」への改組が続いた。教育学部農学関係の先輩方からは、けしからんと言われていたが、結果的には他大学にも波及して全国で数か所の農場を環境教育センターへの改組の方向で守ったことになり、後に「君は良くやった」とお礼を言うてくださる方も少しはあった。現在では、多くの学生、生徒、教職員、市民が彩色園（農園）を活用してくださり、人知れず満足している。

閑話休題して、もう一つ、「環境教育推進法」のことを記録しておきたい。せっかく、日本環境教育学会も創立し、2,000 名の会員を迎えたが、ポンちゃんはこの 10 倍の 20,000 人の会員を獲得して、日本医師会ほどの影響力を持たないと、日本の環境問題を解決に導き、「受験体制」教育の在り方を良い方向に変えられないと考えていた。でも、そのようには発展しなかった。ポンちゃんは学会の運営から外れて、第一義的に重要な環境教育学の核心である「環境学習原論」の構築に専念していた。そこで、第三義的な戦略として、環境教育推進法をアメリカに習い日本でも制定して、環境教育の発展を期すことにした。環境文明 21 の藤村コノエさんに助力を求め、一緒に国会議員に請願するロビー活動をした。学習会やシンポジウムに多くの国会議員も参加してくださり、超党派で議員立法されることになった。参議院本会議の議決まで傍聴に行き、3 名の反対があったが圧倒的多数で法案は成立した。NPO による提案が議員立法されるのは、民主主義のもっともな道筋だ。

ここに至るまでに、日本環境教育学会の運営委員会に、私はすでに 1 会員に過ぎなかつ

たにもかかわらず、呼び出されて、「環境教育は法になじまない。怪しからん考えだ。」などと、お説教を受けた。しかし、成立してしまえば、そのような意見は忘れ去られ、お説教なされたご本人たちも、自分たちの成果のようにふるまい、活用せよとばかりに変節してしまった。ポンちゃんは最初の提案者で、このことは文部科学省や環境省の有力者も知っていたはずだ。したがって、具体的に運用する委員会に呼ばれ、とても忙しくなることを恐れたが、まったくお呼びはなく、提案者の趣旨は黙殺された。第一義、学者として暮らすポンちゃんには、自分の時間を失わずに済んだので、結果良しなのだが、とても不条理を感じた。環境省が閣法として提案できずにいたので、渡りに船と議員立法に乗り移り、換骨奪胎しようとしたのだろう。

この様に、現場で自ら働き、かなりの仕事を成したと自負しているが、現実には黙殺されてしまった。民主主義の時代で、暗殺こそされなかったのも、それでも良しとせねばなるまい。自己の名利を言いつのり、売り込まないので、仕事量の割にはあまりに無名である。それで構わない信条ではあるが、せっきくの成果が正当な評価を得ず、趣旨が普及していないことのみがまことに悔しい。しかし、無名は無力に等しいこの国の先行きが悲しい。

高校生のころ読んだ小説「形」（菊池寛）にあるように、人は形によって惑わされ、他者を品定めする。見た目の服装で人品は判断される。名刺を出せば、所属と肩書でのみ、これまた能力まで判断される。もちろん、確かに経験的に言えば、当たっている部分も多いのだろう。いわゆる就職活動の大学生が黒のリクルート・スーツで身を包み、若者が個性を埋没するのは気味が悪い。若者の個性的な服装を委縮させる会社の面接であってよいのだろうか。社会人になり、形や肩書が必ずしも全人的に的確な評価を与えないことを感じ、人間は中身だと自覚した頃から、ポンちゃんは着心地の良い服装（カジュアル、決してラフではない）をするようになった。

ポンちゃんは前世ではよほど悪人であったのだろうか、現世では、すでに子供の頃から、名利を求めず、人知れずとも社会奉仕をすると決心していた。しかし、この世では、名利を求めて多くの人びとは集まるので、提案者に名利がないと何かを成そうとしても協力は得られず、実現するには至らない。良い考えも行為も広げることにはできない。一方、名利を得て目的が実現に向かい、たとえ達成しても、その過程で名利に溺れて依存したら、墮落する。得られた良い成果は望まない現状維持に取り込まれてしまい、本質が骨抜きになる。このような文を書いていること自体も、露悪的に言えば、ポンちゃんも裏に名利を求め、隠しもつ二律背反である。

貧乏、非力の色男、ポンちゃんは、確かに高本文雄先生の名声を借りなければ、これらの仕事を成し遂げることはできなかった。官僚や政治家など関係者の与論を作り、市民・世間に向けて世論を醸すのが戦術だった。権力・権威の力がなければ、この国でも実現できないことが多い。現場に出ない人々はきれいごとを言う。こだわりもなく、節操もなく、主張を軽く翻す。現場は泥沼であるが、その中で蓮の花は咲くのだ。実に、環境教育やEcoは世に認められるようになると、次第に名利を求めて悪用され、良識でも正義でもない目的にそぐわない虚偽の部分が拡大してきた。この行為は既成の権力や権威によるばかりでなく、それを非難する対抗側も類似の行為を意識的・無意識的にしている場合がある。考えなしの「正義」は意図した悪意よりも恐ろしいものだ。

環境教育実践施設は、やっと名称変更して、環境教育研究センターになった。国立大学が法人化されたので、名称は文部科学省令による必要がなくなったのだ。20人規模の研究

所にしたかったが、大学幹部からは「あんたは頭がおかしい」と一蹴された。家庭や地域社会、この国や地球規模であれ、環境のうえで暮らす私たちにとって環境・教育はもっとも基礎的な学習行動だ。不登校が10万人以上、自殺者が3万人前後、高い地位にある人や学歴ある人の犯罪も少なくない。教育関係者の猛省が必要だ。社会を改善するため、本気の「教育学原論」が必要だ。

第12話 国際的な環境教育活動

放蕩息子であるポンちゃんは、運よく適当な師匠に巡り合って、植物の世界を人生の遊び場にすることができました。こちらの話はまだまだ尽きることはないのですが、いまま少し世界のためにまじめに働いたこともあったので、自慢しておきたいと思います(オホン)。

タイの王立科学技術教育研究所から環境教育視察団が東京学芸大学においでになり、ご案内したご縁により、ユネスコのアジア事務所から環境教育研修移動助言者として、1994年にバンコックに呼ばれました。ドムアン空港には、黒塗りのベンツでオーストラリア人のマクリーンさんが迎えに来ていたので、要人待遇でパスポート・コントロールはすぐに出られました。彼の奥さまは日本人です。こんなことは初めてのことで、もちろんその後もありませんでした。

同時に、オーストラリアのデビーさんも呼ばれており、元気な彼女が研修の場をとり仕切って欧米調の環境教育プログラムを雄弁に紹介しました。ポンちゃんは、タイ語はもとより、流ちょうなオーストラリア弁で一方的に話すことなどではしなないです。一週間もある場の居心地の悪さをどうしようかと考えました。一つは日本語の教材を英訳すること、しかしタイ語に訳すわけでもないで、これだけではまったく能がありません。そこで、デビーさんの研修内容のなかにない課題を考えました。欧米の科学的な環境学習プログラムにないこと、アジアの環境学習の側から提案できることを整理してみたのです。生活環境を全体として俯瞰する視線がないことに気が付きました。特に、それは食べ物への感謝および自然や精霊への信仰に関する学習プログラムです。欧米にアジアから提案できる全体論的な環境学習の重要な内容だと思います。もちろんたどたどしい英語で、自然文化誌研究会の冒険学校の実践事例と合わせて、提案しました。

滞在中はタイ料理や熱帯の果物を満喫しました。タイの人々はとても親切です。果物が好きだといったので、夜ごとに何かの差し入れがありました。恥ずかしながら、果物の王様ドリアンなどという高価なものは召し上がったことはなかったので、匂いの強い羊羹のようなものを頂いても、これが季節外れのドリアンの姿だとは知りませんでした。ピーマンをどうして食べるのかなと口にしたら、シャリシャリと美味しく、それがフトモモ科のレンブだとは無知なポンちゃんは後で知ったことです。

研修の途中の日程で、急にパタヤに行くと伝えられ、地元の教員方を集めて研修会でもするのかと推測しました。ところが水着をもってきただろうとタイの諸先生方はおっしゃる(写真)。アメリカ軍がベトナム戦争のときに兵士の保養地に使っていたのがパタヤだったそうです。要するに観光旅行をともに楽しもうということだったのです。海に入り損ねたポンちゃんを楽しませようと、ティファニー劇場に連れて行ってくださいました。「あなたは何もしゃべるな」と言われ、タイ人料金で入場、デビーさんは隠しようもないオージーだから外国人料金でした。美しい方々が笑顔満面に踊っていたのですが、一人ラダワン先生だけがユネスコのアドバイザーをこのようなところに連れてきてけしからんというようにお怒りでした。この時、「竹を割った」ような江戸っ子気質に共感して、義姉弟の関係を結びました。ラダワン姉はタイで最初に環境教育センターを創立し、私は日本で最初に野外教育実践施設を創立していたのです。別の先生はアドバイザーをトゥクトゥク(三輪タクシー)に乗せるなんて失礼と言いながら、クロコダイル・ファームに連れて行ってくださいました。何百というワニ、爬虫類の眼の睨みと巨大な口は恐怖だったな。

このご縁から、ラジャバト大学プラナコンの大学院で講義をもつことになり、その後、

タイ・日本 TJ 自然クラブを創り、20 年来のお付き合いが続いています。さらに、国際シンポジウムを森とむらの会のご援助で企画して、今はなき麻布グリーン会館で開催し、ラダワン姉らタイの方々、オーストラリアからジョアン・ウェブ先生らをお呼びしました（写真）。この成果を見て、東京学芸大学の西澤事務局長がご助力くださり、さらに大きな国際シンポジウムをオリンピックセンターで開催し、欧米やアジア各国から 10 人ほどをご招待することになり、500 人以上の参加希望がありました。これらの実績で、文部科学省のお覚えめでたく、ついにユネスコアジア太平洋環境教育セミナーを毎年開催することにつながりました。毎年、10 カ国ほどから参加者が来訪してくださいましたので、この伝でいくつかの国に行き、お世話になりました。また、文部科学省の国際連携タスクフォースにもタイとの交流事例を取り上げていただきました。

輪はさらに広がり、国連大学の坂本憲一先生のお誘いで、国連大学ゼロエミッション活動に参加させていただき、共同研究もあってか、当時のヒンケル国連大学長に公的にご紹介いただきました。他方、京都大学の河野昭一先生からご推薦いただき、セントルイスで開催された国際植物学会のシンポジウムで招待講演をしました。ちょうど、マクグワイア選手が 500 本を超えるホームランを打った球場の近くに国際会議場があったので、その瞬間、祝福の花火も見えました。ついミーハーでカルディナルスの T シャツを土産に買ってしまい、ステッカーも得意になって車に貼っていました。このように、国際会議の場で ELF 環境学習過程を提案して、批評をうけながら、発展させてきたのです。なんとか、つたない英語で世界を渡ってきました。

もう一方で、文部省の若いお役人様から、始まったばかりのワールド・スクールの手伝いをしてあげたらと勧められて、高野孝子さんに出会いました。ワールド・スクールというのは、高野さんを含む国際隊が犬ぞりで北極圏を旅行する様子を、パソコン通信で世界の子供たちと共有する試みでした。エコプラスとのおつきあいはこの時からです。グレゴリー・マイケルさんの日本縦断旅行の企画にも協力しました。今、小菅村で栽培している団子麦は、彼が瀬戸内海の大三島の農家から頂いてきた種子をつないでいるものです。環境協会の依頼で、デンマークとドイツの環境教育の調査に行き、ワールド・スクールの運営委員であったデンマークのインガ・リーズさんの家に泊めていただきました（写真）。林野庁の調査依頼で、カリフォルニアの野外環境教育事情の調査に行き、ジョセフ・コーネルさんのお世話にもなりました。

この冒険教育実践ワールド・スクールは、当時アメリカの副大統領であったアル・ゴア氏に高く評価され、まだ始まったばかりのインターネットを用いた環境学習プロジェクト GLOBE（地球のための環境学習観測プログラム）につながりました。NOAA（アメリカ海洋大気庁）や NASA（アメリカ航空宇宙局）との協力による GLOBE 日本の中央センターを文部科学省の委託で東京学芸大学が受け、今日まで継続しています。これの日本拡張プログラムが EILNET（環境学習ネットワーク）で、とても良い活動でしたが、たった 2 期 4 年の事業でした。インドのシタラム先生（国際雑穀フォーラム会長）のお嬢さんラシュミも参加してください、カレー談義をしたのは楽しかったです。ちなみにこれらの実践報告は隔年発行されています。

これらのお客様をご案内する際には、自然文化誌研究会のメンバーがいつも一緒にお付き合いをしてくれ、ほんとに助かりました。それらの自然文化誌研究会が支えたパイオニア活動の、ポンちゃんだけが知る事実を書いておきたかったのです。この国では最初に創業・起業した人々、独創的なパイオニアたちは評価されず、黙殺されてしまうことが多い

です。鎖国以来、とりわけ明治維新の脱亜入欧政策以来、模倣し商品化することこそが「新しい流行」だともてはやされているのです。閑話休題、次回からは、また、ちょっと作り話っぽい冒険探検旅行の話に戻ります。



写真：上から下に、国際シンポジウム参加者（日本）、パタヤの海岸（タイ）、環境学校の移動実験バス（デンマーク）。

第 13 話 ポンちゃん最後の冒険

『ファイマンさん最後の冒険』(Leighton 1991)になぞらえて、ポンちゃん最後の冒険について書いておきます。ちなみに、R. P. ファイマンさん(1918~1988)はアメリカの理論物理学者でノーベルプライザーです。趣味のバンド仲間と一緒にユーラシア大陸のおへそにあるチューバ自治共和国に行くことにして、悪戦苦闘の過程を記した冒険記がこの本です。チューバは、モンゴル人民共和国の北西に隣接してあります。あるいは日本人と一部同祖だったのかもしれませんが。残念ながら、ポンちゃんは当時のファイマンさんと同年 70 歳になろうとしており、趣味の冒険仲間もおらず、もう、チューバにキビを求めての学術探検旅行はできません。そこで、別の最後の冒険を思いつきました。

若い皆さんには怪訝な顔をされますが、ポンちゃんの人生のかなりの部分は、指導教官阪本寧男老師からキビの起源と伝播の研究に誘導され、それで決まったのです。この人は、「自分はやっと消えゆく雑穀に間に合った男だ」と無責任にも嘯きました。つまり、ポンちゃんは研究人生の最初から、消えゆく雑穀に間に合わなかった男だということになります。しかし、飛び込んだ以上は、必死で尾っぽくらいには掴まなくてはなりませんでした。誰からも認知・評価されることのない研究課題、先行きの不明な迷宮に飛び込むことになりました。この課題は今となってはとても壮大なもので、才の乏しいポンちゃんの短い人生では十分に解き明かせませんでした。第四紀になって人類と植物がどのように関わったかの歴史をたどることですから、内容的にはとても面白いです。

ポンちゃんは無職ですが、でも毎日、百姓、うらない作家としての仕事は沢山あります。売れるような本は書きたくない、自分が書きたい本を書くことにしたのです。ささやかな研究成果を余生でもって 5 冊の本にして、ただし売れるような内容の本ではないので、印刷されることはないでしょうから、インターネット上で順次公開しています。

さて、そこでポンちゃん最後の冒険は、唐突に聞こえるかもしれませんが、日本国憲法に、自分の食べ物は自分で得る生業原理を加えるように提案することです。かつて、環境教育を促進するために、環境教育推進法を提案して、超党派国会議員立法をしていただきました。世の中が環境課題にあまりに関心でなかったから提案したのですが、環境教育推進法ができて、さほどの普及啓発効果もなく、地域環境も地球環境も改善されず、残念に思っていました。その時に議員立法を提案したのは環境文明 21 の藤村コノエさんらとでした。この政策提言 NPO はその後も引き続いて日本国憲法に環境原則条項を加えるように調査研究を続けてきたのです。ポンちゃんは最後の冒険として、もう一度お手伝いすることにしました。環境課題は解決に向かうどころか、一層厳しさを増しています。自分も、人類も、他人事として傍観している持ち時間がほとんどないです。楽しくも、美しい素のままの暮らしを未来に求めるのなら、この冒険には大きな意義があります。

ポンちゃん的环境政策は高木文雄老師から実践で教わりました。彼は海軍主計士官としてシンガポールで敗戦を迎え、捕虜になりました。その後、大蔵次官、国鉄総裁などを経て、森とむらの会会長や本会・自然文化誌研究会の会長もしていただきました。30 年近く、親しく教えを受けましたので、ポンちゃんは植物学者の境界を越えて、環境教育政策を考えるようになりました。ちなみに、父は敗戦直前の 3 カ月を呉の海軍に、祖父はシベリア出兵で陸軍に徴兵されました。幸いなことにポンちゃんは敗戦後の平時に生きてきて徴兵はされてはいません。

ごく少数の人々の民間研究者の提案努力を除いて、当時の敗戦後政府や復活政党の提案

は GHQ(連合国軍最高司令官総司令部)の日本民主化の意に添わず、日本国憲法はいわゆる GHQ の押し付け憲法と言われ続けてきました。しかし、70 余年もたてば、よほど馴染んできて、押し付けであっても合意したと同じような様態になって、大方の無関心を得ているのだと思います。最近、西鋭夫さん(2018)の発掘された GHQ 憲法草案の原本を読んで、日本では隠蔽された当時の状況がアメリカ側の記録メモに基づいてやっとわかりました。

日本国憲法は主権在民や基本的人権をうたっているのですから、いつまでも押し付け憲法だという人々がいるのなら、なおさら明治初期の五日市憲法提案などのように、国民が十分に学び、話し合い、憲法の加筆修正や改訂をしたら良いです。とくに、現憲法に含まれていない環境原則に関しては喫緊の未来課題であるのですから、多くの方々に関心を持っていただき、一緒に学び、考えていただきたいと思います。

戦争は食料の奪い合いから始まります。20 世紀だけでも約 1 億人が旱魃、戦争や失政にともない餓死してきました。急増する人口(2018 年 9 月 5 日現在約 75 億人)と食料問題は知性によって対応・解決すべきで、戦争によって制御すべきではありません。そうであるのなら、自分の食べ物は自分で得る生業原理は強く再確認され、広く合意される必要があります。何でも金で買えば済むのではなく、日々の暮らしを支える生業は楽しい人生を保障します。市民農園(クラインガルテン、ダーチャなど)を拡大し、家族の食料の一部でも面白く栽培するべきです(写真)。

ポンちゃんも最後の冒険について次のシンポジウムでお話しします。日頃立ち入ることのない国会議員会館ですが、是非見学もかねて、お誘いあわせてご参加ください。





写真：上は小菅村のポンちゃんのダーチャ（守屋秋子さんにお借りしている畑）、下は雑穀栽培見本園。

第 14 話 雑穀街道を FAO 世界農業遺産に

なぜか、コリアの鉄道駅の待合室にいた。観光旅行会社のツアーに参加していたようだ。この終着駅でいよいよ旅の終わりになり、国際空港駅までの列車に乗ることになったようだ。ところが、みな切符を持っているのに、ポンちゃんだけ切符がなく、自分で買えと朝鮮語で言われているようだ。財布にウオンはほとんどなく、高額貨幣と引き換えられるような書類があるだけだ。もたもたしているうちに、もう切符は売り切れたので、お前は列車に乗れないぞ、と言われた。ここで、二度寝の目が覚めた。

このところ、ポンちゃんも、もういい歳の大人になったので、冒険活動はそろそろ若者たちに引き継いだつもりだ。気楽な観光旅行をすることにして、観光旅行会社のツアーに参加している。添乗員さんの後をついていだけなので、緊張感もなく、緊急な状況への危機対応をしなくなった。だから、わけもわからず、こんな怖ろしい夢を見たのだろうか。夢見が悪いのは、いまだに冒険心が消えやらずにくすぶり続けているからだだろう。そこで、『ファイマンさん最後の冒険』に習って、ポンちゃん最後の冒険は「雑穀街道」を FAO 世界農業遺産にすることに決めた。人生はいまわの際まで挑戦と冒険だ。多様な雑穀も、冒険探検も「絶滅危惧種」にはしてはいけないよ。

FAO 世界農業遺産とは、伝統的な農業と、農業によって育まれ、維持されてきた、土地利用（農地やため池・水利施設などの灌漑）、技術、文化風習、風景、そしてそれを取り巻く生物多様性の保全を目的に、世界的に重要で、持続可能な農業の実践地域を FAO（国連食糧農業機関）が認定するものである。FAO も大いに反省したのか、大規模農業の称揚のみから、小規模家族農耕の重要性を強調するようになった。日本ではほとんど無視されてしまったが、2014 年は国際家族農業年であったようだ。FAO 世界農業遺産は、第一に、先祖の生業の歴史、暮らしの基層にある伝統的知識や技能を受け継ぐ責任と誇りである。観光客が増えるとか、助成金がもらいやすくなるとか、これらお零れは二の次のことである。学術的な内容保証が求められてもいるが、現実には行政主導でその担保がなくてはならない。

自然文化誌研究会が山梨県上野原町西原での、「雑穀のむら～雑穀の栽培と調理」の調査研究（1974）から始まったことはすでに書いた。これらの成果に基づいて、雑穀を栽培する生物文化多様性が日本でもっとも豊かに保たれてきた地域、多摩川水系の丹波山村、小菅村から相模川水系の上野原市、相模原市緑区までをつなぐ道を、雑穀街道と勝手に呼ぶことにした。この雑穀街道に沿って、今も雑穀など作物在来品種を多様に栽培している山里が多くある。山女魚養殖を初めて成功させた小菅村橋立、穀菜食による健康長寿で世界に知られた上野原市桐原、トランジション・タウンで知られた相模原市藤野などが続き、FAO 世界農業遺産に認定を受けるにはふさわしい地域と言える。

環境は現在目に見える空間だけで構成されているのではなく、過去から未来へと続く時間と空間から構成されているのだ。目に見えずとも、歴史事実と未来想像は現在環境の枠組みを構成している重要な要素だ。サバンナ農耕文化の雑穀や根菜農耕文化のイモ、これに新大陸農耕文化を含めて、トウモロコシ、マメや野菜類も、ほとんどが世界各地から海を渡って日本列島に伝来した栽培植物だ。絶滅危惧の雑穀在来種を継承、普及する活動をしてきたが、麦類にしても多くが輸入され、あまり栽培されなくなってしまった。初夏に黄金色に熟す麦類は冬雨・夏乾燥の地中海農耕文化の主要な穀物で、日本に伝播しても冬生一年草の性質は変わらないので、麦秋は梅雨入り頃の季語だ。しかし、現在、麦類の栽培は減少し、このために死語寸前の麦秋を伝統的な知識や技能により再現することにした。

栽培植物の在来品種種子を保全するためには、栽培・加工・調理・食作法を共に継承せねばならない。また、伝統を継承するためには新たな手法も加えて、再創作が必要でもある。

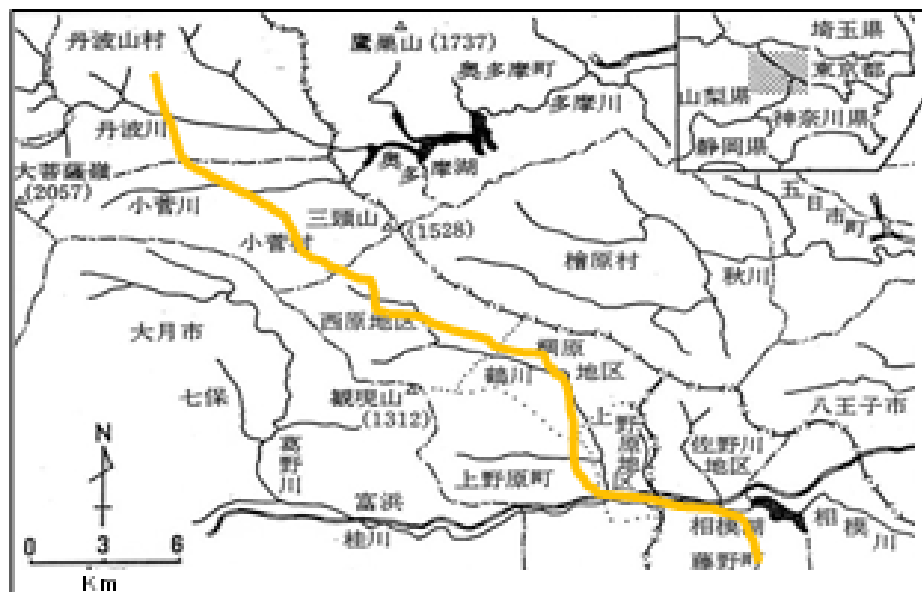
佐藤雅彦さんが、学大探検部 40 周年記念セミナーの時に、これらの活動は「報われることのない仕事、評価もされないし、もちろん見返りはない」とおっしゃっていた。自然文化誌研究会（学大探検部）の任意活動はもとより名利を求めているのではないので、世間が名利で動いているからには評価や見返りが無いのはあたりまえだ。

さて、志しかない冒険探検者が、何の見返りも提供できないのに、名利の権化である行政府から賛同をどのようにとりつけるか、これは容易なことではない。したがって、雑穀街道を FAO 世界農業遺産にすることは、自然や農山村がフィールドであるだけではなく、都市の人々、とりわけ地域（山梨県、神奈川県、上野原市、相模原市、小菅村、丹波山村）から中央（農林水産省）および国際（FAO 国連食糧農業機関）の行政府に納得を頂くために、かなり複雑で、険しい困難を伴う冒険探検ということになる。さらに、この冒険探検は今までの学術調査や冒険学校と違って、あまり経験したことのない方法で、時空間を超えて何千・何万人の賛同者とともに活動することになる。どうぞ、皆様も賛同していただき、一緒に冒険してくださいね。詳細は下記の「雑穀街道ホームページ」で、お知らせしていきます。

<http://www.milletimplic.net/milletsworld/millstr.html>

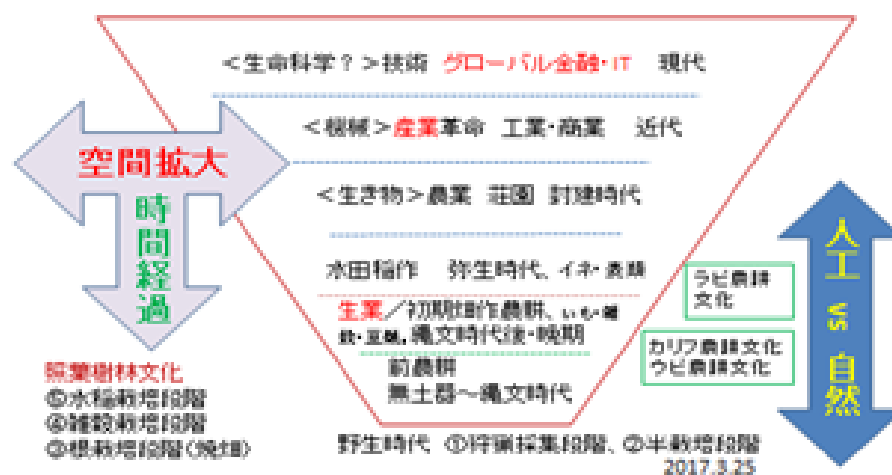
＊ 学大探検部（愛称）は本来の正式名称を「東京学芸大学自然文化誌研究会冒険探検部」といった。自然文化誌研究会と冒険探検部が合同したからである。現在は、NPO 法人自然文化誌研究会、東京学芸大学冒険探検部および同 OB 会、東京学芸大学ちえのわなどの関連団体が連携しながら活動している。

雑穀街道をFAO世界農業遺産に



現在日本の農耕文化の歴史的多層構造

連続的に、混合的な生物文化多様性への蓄積と衰退
複雑／単純、虚無・便利の超克 (The nothing / The convenience)



第 15 話 ポンちゃん冒険の始まりの再発見

ポンちゃん（ぼく）の冒険は伊豆半島への野宿旅行から始まりました。この旅の意味は、今になってやっと分かったことなのですが、小説よりもはるか奇なることに、三人の立派な先達の事績が伊豆半島で地理的かつ心情的につながったのです。

1) 静岡県立有用植物園

大学に入学したばかりの 1968 年の夏、学生サークル児童文学研究会の合宿が伊豆の松崎の寺で行われました。ぼくは高校生の時にたくさん小説を読んで、小説に飽きていたので、大学生になってから童話に興味を移していたのです。合宿前日に、2 年先輩の細川さんが土肥の網元の家の出だったので、土肥の海岸で男子学生 4 人だけでキャンプをしました。研究会の合宿終了後、ぼくは黒田君と伊豆半島を巡る野宿旅行をしました。ある神社の社殿の軒下で寝ていたら、深夜、白猫が走り去ったので、民俗的恐怖を覚えました。翌朝は、東海バスの始発で、県立有用植物園に古里和夫先生を訪ねました。早朝、開園前にもかかわらず、園長自ら快く、礼儀知らずの若者を案内してくださいました。

当時、ぼくは大学裏の里山にアケビを見つけて、その実のおいしさと形の奇妙さに感動して、バナナのように食べられる種無しアケビを作ってみたくなったのです。そこで、まず練習として種無しスイカを作る事を試みました。2 倍体のスイカの苗にコルヒチンをつけて 4 倍体にし、元の 2 倍体と掛け合わせて 3 倍体の種無しスイカにするのです。大学キャンパスのはずれの山林地に焼畑を造り、スイカを育てていました。もちろん、理学部の近田先生の許可を得て行ったことです。このことをお話したら、古里先生からスイカの花粉を所望されたので、花をお送りした記憶があります。

夏休みに、同級生の藤村君と久保さんは三島市にある国立遺伝学研究所でアルバイトをしていて、同じく大学闘争に飽きていた私に同研究所の阪本寧男先生を紹介してくれました。彼はエチピアの海外学術調査から戻られたばかりであったので、2 度ほど大学で講演をお願いしました。貧乏学生の私たちは何のお礼をすることもできず、考えすら及ばなかったところ、和田先生がフォローしてくださいました。

また、当時は知りもしなかったのですが、古里先生との知遇によって、ぼくは国立遺伝学研究所の阪本師の弟子になることができましたようです。最近の手紙（2019）に、古里先生の推薦がなければ、ぼくを受け入れる気はなかったと書いてありました。彼は木原均〔注：パンコムギの起源を明かした世界的に高名な遺伝学者〕の最期の助手であったのですが、当人が自称するように相当の天邪鬼だから、弟子などはもたないと考えていたのでしょう。失礼ながら、孤高の農学者とまで称されたように、世間とは相当ズレていて、旧制中学校生で経験した戦中および敗戦直後の体験によって世俗の名利にはそれなりの反感を持っていたのだと邪推します。彼の薫陶を受けたお陰で、人見知り強く、世間に疎くいたかったぼくの性癖はさらに助長されました。

この体験は彼の人生に大きな心の傷を与えたようで、ごく最近の手紙にも食料の買い出しで経験したいやな思い出を重ねて追加記述してありました。京都近郊の農家は、京都人が持ち込む高価な物品としか、食料を交換してくれなかったそうです。したがって、地元民は配給が不足するときは、遠くまで食料を買い出しに行かなければならず、うまくサツマイモを入手できても、警察に取り締まられて没収されてしまうのです。

ぼくの祖父の実家は稲作農家で、濃尾平野の木曽川のほとり、輪中の中にありました。

一大稲作地帯ですから、ここから親戚として戦争中も食料は分けてもらえていたようですが、それでも敗戦後には、もらってきたイネ米も警察に闇米として没収されたこともあったようです。この祖父は徴兵されてシベリアに出兵し陸軍上等兵で、父も戦争末期に徴兵されて、呉の海軍新兵で敗戦を迎えました。名古屋市は焼夷弾で焼き尽くされ、その恐怖は祖母や母から聞かされたところです。名古屋市の道路が広いのは、爆撃で街が破壊し尽くされたので、新たな都市計画の線引きが容易だったからのようです。

さて、ぼくは7月いっぱい自動車運転を止めることにしたので、廃車にする前に伊豆半島を巡ることにしました。2019年6月に吉奈温泉に2泊して、南伊豆を走りました。事前に旅館の人に、観光ガイドに載っていなかった県立有用植物園について聞いたのですが、要領を得ません。その際に、インターネット検索をしたら、研究報告の記事はあるものの、植物園の存在は不明でした。帰宅後、さらに詳細に検索したところ、1950年に南伊豆町石廊崎に開設された有用植物園はたびたび改称されて、今では南伊豆亜熱帯公園として一般公開されています。いく人かの個人史が不思議なことにぼくの興味と結びついたので、7月にもう一度吉奈温泉に泊まって、沼津市西浦の興農会農場跡を訪ねました（写真）。

2) 日本村塾教育

ぼくは植物と人々の博物館の読書会として、日本村塾セミナーを提唱しているので、時々ネット検索をして、日本村塾の内容確認をしていて、『日本村塾教育』（1935）という本があることに気が付きました。著者の大谷英一はクリスチャンで、太平洋戦争が始まる直前の1935年にこの本を書いています。この時代に、よくぞ書いたものだと驚くような内容で、現在のぼくの考えにとっても近いように感じました。

大谷の略歴は次の通りです。九州大学農学部で農業経済学を学び、1931年に文部省嘱託としてドイツとデンマークに留学、帰国後、伊豆半島の久連（現在、沼津市西浦）の国民高等学校の経営にあたり、1937年、インドで開催されたYMCA世界大会に日本代表として出席しました。戦争中に、当局の圧力があり、それに屈して大政翼賛会に協力したことを悔いて、敗戦後の1946年に校長職を辞して郷里の栃木県に戻りました。その後も、地元で農民教育に尽くし、矢板市の第4代市長（1974～88年）になったようです。大谷の著書『日本村塾教育』は国会図書館で複写してもらい、読了後に、インターネット検索で見つけて、関連した古本『新興村論』（1936）、『平和の國デンマーク』（1948）とともに3冊を購入しました。しかし、『日本村塾日記』（1935）は見つかりませんでした。

そもそも、日本村塾教育の実体は昭和初期に静岡県田方郡西浦村久連にあった興農学園、久連国民高等学校のことでした。デンマークのキリスト教主義に基づくフォルケホイスコーレ folkehøjskole / folk high school を模範として、久連に農場を所有していた渡瀬寅次郎の遺言で、遺族の資金提供により、彼の札幌農学校における旧友、内村鑑三や新渡戸稲造らが協力して、1929年に設置されました。初代校長は平林広人で、青年を対象に共同生活のなかで、農民の実生活に即した教科・実習が行われていました。

1933年に財団法人興農学園となり、久連国民高等学校と改称し、大谷英一が二代目校長になりました。豊かな農業国デンマークの理想を求めて、全国から総計約200名の生徒が集まり、柑橘栽培の研究、講習会開催などをして、地域にも貢献していたようです。ところが、第2次世界大戦が激しくなるにつれて、政府から国粋化の圧力を受けて、1942年には農道塾と改称し、1943年には実際の教育活動は停止しました。敗戦後、大谷は興農学園を再興することなく、故郷の栃木に戻りました。その後を受け継いだのが古里和夫で、1955

年からしばらく柑橘の研究や海外の樹木、コルクガシやエリカなどの保存・公開を行っていたと言います。

3) 人々をつないだ心と場

古里先生の経歴について書かれた文献は国会図書館で探しました。古里先生は興農学園農場を継いで、その後、上記の静岡県立有用植物園長、浜松市のフラワーセンター長を順次歴任されていたのです。ぼくが出あったのはこの頃で、1968～1969年のことでした。彼は1912年に岐阜県で生まれ、千葉高等園芸学校を卒業してから岡山県で女学校教員、1940年に京都帝国大学農学部（木原均研究室）を卒業、南洋興発株式会社で研究開発・農場経営、敗戦後フィリピンから帰国、1946年に木原生物学研究所研究員、同年に興農学園長になり、1954年に国立遺伝学研究所研究員、1960年に柑橘類の細胞遺伝学的研究で農学博士、1961年に静岡県立有用植物園長、1971年に浜松市フラワーパーク公社公園長、1993年に永眠されました。この間に、ハワイ、北アメリカ、ポルトガル、カナリー島、マディラ島、南アフリカ、南アジア、オーストラリア、ニュージーランド、中央・南アメリカ、中国などで、有用植物調査を行ってきました。

ぼくはほんの2、3回お目にかかっただけだけれども、こうして略歴を見ると、木原学派の流れで同じアカデミック・ファミリーであり、つくづく冒険人生の出会いの不思議さを知り、多くの方々の支えに拠り自由な生き方ができたことに、改めて感謝の念を強くしました。

4) デンマーク国の話

興農学園の創業を求めた渡瀬寅次郎はクラーク博士の直接の薫陶を受けてクリスチャンになり、その後、種苗会社で成功しました。彼は晩年、キリスト教の教えを基礎とする農学校を創立したいと願い、遺言で内村鑑三らにこのことを託しました。内村は札幌農学校での一年後輩であったからです。渡瀬がデンマークの農学校に思い至ったのは、デンマーク研究者の平林広人のラジオ放送「丁抹の文化について」を病床で聞いて共感したからで、一方、平林はデンマークの国民高等学校を日本に創りたいと考えていました。平林が銀座教会で内村に会った際にその想いを聞き、内村は賛成して、彼を渡瀬に紹介したのです。

日本村塾教育の思想は内村鑑三の著書『デンマーク国の話』（1913）の影響を強く意識していました。さらに、その大元にはグルントヴィ（N.S.F.Grundtvig）のキリスト教理解があり、農民が高い学問を身に付けなければ、民主主義は衆愚政治になると考えて、ケンブリッジのカレッジをモデルとした「生のための学校」を求めたのだそうです。生きた言葉で語り合い、それぞれの生を深めていくことが目的であれば、資格や試験、単位などは不要だとグルントヴィは考えました。デンマークの国民高等学校は1844年に最初の試みが始まりました。内村は平林からデンマークのことを多く学び、彼にこの世でなすべき最後の仕事である興農学園を託して、1930年に他界しました。{尊敬する人たちの敬称を慣行により書きませんでした、ごめんなさい。}

イギリスのケンブリッジ大学のカレッジをモデルとした「生のための学校」を求め、生きた言葉で語り合い、それぞれの生を深めていくことを目的とし、資格や試験、単位などは不要というグルントヴィの考えは、ぼくの日本村塾 Nihonmura College for Environmental Studies の基本姿勢とまったく同調・共鳴します。ぼくは、日本ではもうさっさと受験教育をやめて、幸せに生きる学びを求めてほしいと考えています。自然文化

誌研究会とともに行った 40 年以上の環境学習実践にもとづいた考察により、単なる環境教育の原理の到達点ではなく、現代の人々の生涯学習の統合原理として環境学習原論を提案しました。

しかしながら、日本村塾の 3 ゼミ（民族植物学、扶桑園、自給農耕）への参加者はほとんどいせんので、実際はウェブ上の塾になっています。日本では資格が得られる学校でなければ、教育や学習は認知されないということで、学校化社会は極まって固定してしまっているのです。自主独立した学びの場はほとんど成立しないのです。ただし、自然文化誌研究会の冒険学校はほぼ常設化して、山梨県小菅村で継承されているので、少数の子供たちに対しては役立っているのだと思います。（詳細内容、文献などは、ホームページのエッセイに記載しました。）



写真：上は興農学園農場跡の石碑、下は西伊豆から駿河湾を望む。

第 16 話 起源を探る風狂の旅

なにごとくも変はりのみゆく世の中におなじかげにてすめる月かな
さびしさに堪へたる人のまたもあれな庵ならべむ冬の山里
吉野山去年のしをりの道かへてまだ見ぬ方の花をたづねむ

西行法師

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり
舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらえて老をむかふるものは
日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり
よもいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず
海浜にさすらへ、去年の秋江上の破屋にくもの古巢をはらひて
やや年も暮、春立てる霞の空に白河の関こえんと
そぞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて

取るもの手につかず

松尾芭蕉

余の風狂もつとに風邪を招くようになった（ポンちゃん）。長らく世間からの出家を願いながら、家族に未練があり在家のままで過ごしてきた。俗心が抜けず、若干ドラえもん体型なので、情けないかな、風邪を引くようではまだ風狂がか細いのだ。

人類文明の退嬰はいよいよ大津波のごとく押し寄せている。終末時計は午後 11 時 58 分になったそう。近未来はどうなるのだろうか、引き波は何を奪っていくのだろうか。海の底の流れは緩やかであろうが、海面の潮流はせわしく蛇行していく。夢の超特急の現代社会は巨大に膨れ上がった不安から、世界中で数知れぬ悪意が満ちてきている。人々は教養と信仰に対する信義を衰微させてしまった。

多くの人々がそうであったように、余も旅に拠って学びを深め、教養を積んだつもりだ。穀物、雑草、一年生植物の起源を探ることが、植物に依存する人類の古代文明の源流へと遡り、そこから原理・原則を学び直し、生き物の先真文明の時代を誠実に暮らすことにつながるのだと考えるようになった。北極星は地球から見れば、ほとんど不動で大海原を旅するには良い道標だ。原点、原郷、原典こそが温故知新、混迷の現代文明を真文明へと導き、メービウスの環から脱して、再生の鍵を与えてくれるだろう。

表層の流行に追われ、走り続ける世相、これを生物学にたとえて言うと、生理学でぶっかけ実験をすれば、それなりに植物は反応して、これを機器分析にかけると限りないデータが出てくる。短い論文は短期間に増産される。しかし、それは消費・廃棄されるにすぎず、ほとんど残ることはない。これが嫌になったのは、20 代前半のことであった。そこで生態や形態の遺伝進化学の方向に進むことにした。機器分析よりも、野外で観察、実験することで、確かな事実による植物の生活史を明らかにしたかった。長期間かかる実験であり、論文の量産はできない。さらに、植物と人間の関係史を求めて、民族学の領域に踏み込んだ。人生の学問の旅に限りはない。

このくにでは教育を再生すると言いながら、いつまでたっても所詮は有名校に入ること、受験での成功に関心を置いているにすぎず、教育、学ぶことの本質を見失ったことへの反省はない。学びの根源、人生に求めるもの、本質こそ大事だ。自由に探究する楽しみ、幸せに暮らすこと、家族や地域、世の中の役に立つこと、学びの本質はここにあるのではな

いのか。有名校に受かったからと言って、それはほんの一握りの人にとっての、しかも単に始まりにすぎず、幸せで意義のある人生は、それで手に入ったわけではない。短い人生でも、それは一連の時間だ。学校など行かなくても、学びの機会はいくらでもあるし、幸せになることはできる。20万人余りの非登校の子どもたちがなぜ学校を嫌がるのか、いじめが無くならず自殺に追い込まれるのか、大人社会の根本の要因を見ないふりで、避けていては、子どもの未来もこのくにの将来も危うい。家族や地域社会を守ること、人任せではいけないんだ。地域創成などと言って行政任せ、憲法改正と言って政党任せ、市民やこく民が主体であるはずだ。湯水のごとく税金を無駄遣いしないで、もっと自分で学び、考え、細やかな私財や私力で社会のためにも働くことだ。

かつて若い頃、旅は風任せであった。次は自分で計画するようになった。老いてきた今は旅行会社任せである。人任せはとても楽である。しかし、そこに退行が潜んでいる。このくにの人々は、人任せばかりするようになった。最近ではAIとまで言い出して、ついに人間はいらなくなってしまう。それが幸せなのか。自律できないように習慣づけておいて、自己責任と言って突き放す、世間は冷酷だ。それが世間であれば、やはり自律して生きるように、自助鍛錬せねばならない。それなら自己の意思する風狂に身も心も任せるべきだろう。

旅での出会いは、自分を育てる。壮麗な自然景観であれ、美しい花々であれ、荘厳な大聖堂であれ、長閑な茅葺民家であれ、上手な絵画や深遠な書物であれ、働く人々や寛ぐ人々であれ、出あった人々、事物、事象はとても愛おしい。温故知新、根源を探る人生の旅を楽しもう。人間は自然が好きだったし、人間は人間も好きだった。そこで、植物と人々の博物館の特別展示では、余の植物の海外調査道具と採集野生植物をお見せすることにした。ぜひ、お越しいただきたい。面白いぜ、旅は！！





写真： 上は蒙古族の人々とゲルの前で（内蒙古砂漠化調査）、下はライ族の人とヒマラヤ登山学校の入り口で。

第 17 話 花のように生きなくなった日本人

V. W. ファン・ゴッホ（1888）は親愛な弟テオへの手紙に、ある日本人たちのことを次のように書いてくれた。「かくも単純で、あたかも己れ自身が花であるかのごとく自然のなかに生きているこれらの日本人がわれわれに教えてくれることこそもうほとんど新しい宗教ではあるまいか。もっと大いに陽気になり、もっと幸福になり、因習の世界での我々の教育や仕事に逆らって自分たちを自然へと立ち返らせることをせずに、日本の芸術を研究することはできないように思われる。」

妖怪人間ベムは「早く人間になりたい」と言う。「ある実験により 1 つの細胞が分裂して生まれた、三人の“妖怪人間”ベム・ベラ・ベロ。彼等は、人間に勝るとも劣らぬ優しい心を持っているにも関わらず、その醜い容姿ゆえに人間から迫害され続け、人間になる方法を探し求め数十年間に渡って街から街へとさすらい続けてきた（ウィキペディア 2017）。」彼らもきっと阿修羅なのだ。

阿修羅とは古代インドの神の一族、後にはインドラ神に戦いを挑む悪神とされる。仏教でも天竜八部衆の一として仏法の守護神（8 種の異類）としながら、六道の一として人間以下の存在とされる。六道とは、衆生が善悪の業によっておもむき住む六つの迷界、天道、人間道、修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄道のことである（広辞苑）。長野善光寺に 6 菩薩像があり、それぞれの道の衆生を救おうとされている。

ポンちゃんのもう一つの阿修羅として生きると意思した（木俣 2005）。この時のエッセイを要約する。ひろさちや（2005）が『わたしの中の阿修羅』で、傲慢不遜の心をもって天を仰ぎ見る阿修羅に「汝、諦めるべし」と言い、ジョージ秋山（1970）の『アシュラ』、萩尾望都（1995）の『百億の昼と千億の夜』の阿修羅、新美南吉（1992）の『ごん狐』は阿修羅の想いを描き、さらに、宮沢賢治（1923）は『春と修羅』で「おれはひとりの修羅なのだ」と詠っている。山の神の使いである門男になりたいポンちゃんも阿修羅なのだ。

このくにの人間はゴッホが想ったように花のように美しいのかを問いたい。彼らが「人間道」にいても、実は（餓鬼道や地獄道にいて）人間の振りをした野獣か、野獣の皮を被った似非人間であり、その心性があまりにも醜いのなら、私は阿修羅のように、美しい人間になるため、解脱に向かって修羅道を生きたい。心を開いて孤独を求めず、勇気を励まして孤立を恐れないようにしたい。このために、今、解いておきたいこのくにの 3 つの謎がある（黍稷農季人 2018）。

第一の謎、何故に現世の人々は先人の生活文化、庶民の歴史に関心がなく、先祖への敬意を失ったのか。過剰な都市の便利に幻惑わされて、自然離れし、生業を忌避して、人間であることを自己疎外しているのだ。自然や先祖とのお付き合いを失ったら、文化的に、精神に変調をきたすだろう。先人の自然を基層とする文化は山村に何とか今でも残っている。ここから、都市民は自然との付き合い方、祖先の生き方を学ばなければならない。山村には伝統的知識と技能を伝える現代的な仕事、職業が希求されるのだ。

第二の謎、何故に自然文化誌研究会の環境学習活動は有耶無耶のうちに地域社会の有力者から四度も追放されてきたのか。お付き合いしている方々はとても親切なのに、私費でかつ任意の労力も地域社会に提供しているのに、さらに経済効果も高いのに、大いに地域に貢献しているのに、何故に有耶無耶の不情理によって追放されるのか不思議で仕方がない。浅い付き合いまでは為政者が利用できるのです都合も良いが、恐らく、行政の仕事範囲を超えた成果が出て、村の変容に踏み込み始めたためと為政者に解釈されると、彼らの領分を

侵犯し、面子を潰したとして、その後は弾き飛ばされるのだろう。自然を忘れた無知な都市民が恥知らずに山村を軽視し、恩知らずに犠牲を強いてきたため、山民の誇りが痛く傷つき、脆弱になったからに違いない。それで排除されても、もうポンちゃんは山村から逃げ出さない。

第三の謎、何故に地域社会を守るために働いた人々を、地域社会は黙殺してきたのか。明治維新の功罪のなかに隠蔽された重罪である。明治の半ばには大方の抵抗は鎮圧された。自由民権の徹底した弾圧（治安維持法）が恐怖を刷り込み、地域社会は沈黙したのだろう。足尾銅山鉍毒事件や水俣水銀公害などもみな同じように、常民・市民を守るべき為政者に隠され、抑え込まれてきた。これが不実虚偽と事実隠蔽の歴史ではないのか。王侯貴族の金銀財宝、権力の歴史だけではなく、常民・市民は自らの生業や抵抗の歴史を学び、忘れないことによって、自由、平等、友愛を広げてきた先人の努力を感謝・尊敬すべきだ。

現在、我々がとらわれている因習とは、過剰な商品経済に踊らされ、流行に溺れ孤立し、虚無を一層深めていることである。都市文明の過剰な便利に収斂すれば、人間は最終的な心の源郷、避難場所さえも失う。その自然や山村にすら、人生を楽しく暮らす場が無くなる。今、ポンちゃんの冒険行動は、統合へと向かってきた人間の心の構造が過剰な科学技術の便利により、また情報機器に依存して、知能の分断へと退行する危機に抗う進化史の探求にある。

独立自尊は小菅小学校の校訓である。山民は厳しい自然に挑戦し、共存・共生して、誇り高く暮らしてきた。その生活や生業は三浦梅園が言う深山幽谷に美しく咲く紅の花である。どうか、山民は自然に挑戦する心、冒険心、勇気や誇りを、都市民に学ばせてほしい。弱くなったこのくにの人々の心を、咲く花のように楽しく、幸せに導いてほしい。

湯川洋司さん（1991、1997）は全国の山村を訪ね歩いた民俗学者だ。彼は、山のむらしさを損なわずに自律的な暮らしの設計が可能になる道を模索することが大切であり、食料を自給する一方、木材を活用しつつ茶・椎茸・楮・三桠などの山の産物を商品化して自律的生活を打ち立てるのが良い、と述べている。ポンちゃんは彼と同じようにユーラシアの山村を訪ねてきたので、彼の温かい想いにはまったく共感する。上野原市西原地区の降矢静夫老師はもとより、丹波山村の岡部良雄さん、小菅村の守屋秋子さん、西原地区の中川智さん始め、敬愛する山民に習って、自律して生業を楽しみ、暮らしていこうと思う。



長野善光寺の六菩薩像、左から3番目が修羅道の菩薩さま。



中川さん宅での雑穀脱穀作業。



西原地区の景観。40 年以上見てきたが、里山は変わらず美しい。

第 18 話 ヨーロッパの美しい村や街を訪ねて

ユーラシア大陸のアジア地域における雑穀の起源と伝播について 20 世紀後半に現地調査をしてきましたが、21 世紀に入った頃から、ヨーロッパ地域に出かけることが多くなりました。現職の頃の旅の目的は調査研究ばかりでしたので、退職したら家族のお供の者として観光旅行をする約束をしていました。個人旅行で、どこかの国の特定の街に一週間程度宿泊して、周辺の街や村を訪問していました。ところが、しばらくして老化のため体力も怪しくなり、またヨーロッパの社会不安も高まってきたので、大手旅行会社のツアーに参加することにしました。しっかり企画された 1 週間程度の広域旅程の中で、それでも密かに自分の興味に沿う事柄をなんとか見出しました。たとえば、マーケットでの雑穀販売、農耕地で雑穀の栽培状況や雑草の種類などを観察してきました。現地のマスター・ガイドの蘊蓄はさすがに面白いです。この数年間に、いくつかの国で美しい小さな村や街を訪問しました。そこで、日本の村々の有り様と比較してみようと思います。

テレビ・プログラムのドキュメンタリーで、イタリアの小さな村の物語を見て、いつも個人、家族、村人の人生における温かい暮らしぶりが丁寧に描かれていて、心が安らくなります。誰の、どの家族の物語も苦難の時はあったし、今も苦勞は絶えることはないのですが、個人の思い、家族の願い、村人の交わり、これらが暖かく語られて行きます。経済的に貧しいと言いながら、家内の調度は堅実に整頓しており、マンマの暖かい手調理が供され、子供たちは高等教育も受けています。大きな街で医師、料理人や技術者として良い職につけるのに、あるいはについているのに、相応の人々が生まれた村に戻り、自然に抱かれ、家族との穏やかな暮らしを受け継ぐことを選んでいきます。ヨーロッパ人の近代精神の自由と平等は個人の自律で、その個人こそが友愛に溢れ、これによって楽しい地域共同体社会が形成され、維持されているのでしょう。

そのように理解すると、ぼくはこの日本の国や村に欠如しているのは、個人の自律だと思うようになりました。自律していることは孤立していることではありません。もとより均質的な生き方でもありません。もちろん、自律するためには経済的自立が必要で、なんらかの職業や産業がなければなりません。日本の農山村では家族農業をしながら、他の仕事を兼業し、自然環境保全や伝統知継承、居住地・第一次産業従事者として直接支払制度の保障を権利として政策的認知を受けても良いと考えます。また、行政などから委託された度重なる地域調査の結果から可能性のある産業として、単なる観光業ではない複合的なエコスタディ・ツーリズムを提唱してきました。自然離れした都会人に自然の美しさや生業技能、伝統的知識体系を伝えることでいくらかのガイド収入が得られれば良いと思います。また今、ぼくはこの国に生業の自由や食料自給の権利を憲法で保障するように求めたいのです。幸福はそのままの美しい暮らしにあるのだと知れば、現代日本の貪欲な都市文明病は気候変動にも対応でき、改善するのだと思います。

1) イタリアの村

2017 年に訪れた Civita 村は地震で道路が崩れた城塞都市（街）。三方が崖で、城塞を繋ぐ道路が壊れて孤立しました。現在は観光客が橋を歩いて訪れるようになっています。近隣の村では有機農業が熱心に行われているようですので、在来品種種子の自家採種などについて現地のマスター・ガイドさんに聞いてみました。



2) フランスで最も美しい村

2014 年に、モン・サン・ミッシェルへと向かう途上で、立ち寄った美しい村 Beuvron-en-Auge は、街道沿いの小さな村で、素のままの美しい暮らしがあると感じ、とても気に入りました。広場を中心に小さなお店が並んでいます。観光客のために特段の何かをしているようには見えません。訪問時間が早かったのか、村に一軒あるパン屋さんも、大方のお店も閉まったままでしたので、ビジター・センターで Calvados (リンゴの蒸留酒) と Cidre の小瓶を土産に買いました。



2019 年にニースに行く途上で立ち寄った Roussillon 村、ここでは茶色系の絵の具になる土が採掘されるのです。地中海気候の林に赤茶色の露頭が現れているのはとても美しいです。丁度、写真の民家の壁の色のようです。村では絵の具なども売っています。涼しくなったので、また絵描きを再開しようと、土絵の具の 8 色セットを買いました。丘陵の反対側には別の美しい Gordes 村もあります。

フランスで最も美しい村協会に認定されるには、人口が 2,000 人以下、文化財が 2 つ以上あること、美化に努めていることなどの条件があります。現在 156 の村が認定登録されています。



3) イギリスー美しい村

2017 年に湖水地方やコッツウォルズに行きました。Chipping Camden ははちみつ色のラ

イム・ストーンや茅葺で造られた家並みが美しく、Bibby はウィリアム・モリスがイギリスで一番美しい村と言ったように、何百年も続く家並みも家庭菜園もよく手入れされています。キツネノテブクロが美しく咲いていました。この景観を刺繍の題材にし、また電子書籍『環境学習原論』の表紙にしました。



3) ドイツ・ロマンティック街道

2015 年に、ロマンティック街道でノイシュヴァンシュタイン城に向かう途上の Rothenburg は小さな村ではないのですが、中世 10 世紀以来の自由都市の街並みが美しいので、参考までに載せておきます。街道を訪問した証明書をもらうことが出来ました。



4) ポルトガルが一番美しい街オビドス

2019 年に行った Obidos は城壁に囲まれた小さな街（村）で、家並みを飾る花々が美しく、谷間の真珠と呼ばれています。白壁にシンボル・カラーの青と黄色のラインが映えます。



何百年も維持継承されてきた家並みが美しいのは、石造りだからでしょうか。木造では家並みを保存できないのでしょうか。よく見ると、ヨーロッパの家造りにも、木材が梁や床材によく使われており、すべて石で作られているのではありません。耐火性に優れているとはいえ、不燃ではないようです。明るい色調の美しさも、地域の居住者の合意によって維持されているのでしょう。日本の村は良く言えばわび・さびの世界か、どうしてもくすんでいるように見えます。とはいえ、白川郷の景観は美しいです。

素のままの美しい静かな暮らしが維持されているところもあります。一方で、観光化、さらに商業主義が行きすぎて、訪問者が多すぎる、外部からの商品・商店にとって代わられる、など、居住者にとっては良いことばかりではないようです。観光受け入れの適正規模がどの程度か、適切な内容は何かなどの住民間の合意は必須でしょう。日本の村では、残念ながら容易に合意形成はできず、国からの直接支払保障や投資もあまりに少ないようです。山間地が多い日本では治山治水への対処も必要です。旧世紀の呪縛を解き、孤立したムラ社会や行政依存の態度は改めて、村民は自立した村づくりを意思すべきです。日本にも美しい村が維持されることを村人の努力はもとより、行政に対して社会的共通資本にたいする基盤的投資と政策実現を求めたいです。

第 19 話 最期の未来を探しに辺境へ

ポンちゃんは民族植物学者なので、美しい花と女が好きだ。今時、こう言う率直な表現をするとすぐにセクシャル・ハラスメントと言われるだろう。美しい物事、事象、人々を愛でることは至極当たり前の心情で、何ら責められることではない。自然美を愛でるに臆することはない。世界史か美術の教科書でか、見知ったクレタ島のミノア文明の壁画片に描かれていた少女パリジェンヌの眼差しのように、大らかであってよいのだ。どんな花も女も化粧し、着飾って美しく装っているではないか。それはジェンダーgenderを越えて人々に愛でてほしいからだろう。それなら、無意識下にほどほどのやさしい視線を注ぐくらいは了解されることではないのだろうか。これをもセクハラと責められたら、双方に美を愛でるといふ人生の楽しみがなくなると言うものだ。しかし、世間のニュースを見聞していると、どうして悪人は女や男で、よい人は女性や男性と表現するのか。性は sex ではなく本性 nature という意味で使用しているのか、これらの区別の理由がいまだにわからない。良い女や悪い男でもいいではないか。



写真 1. クレタ島のパリジェンヌ (Wikipedia より引用) と降矢さんの門男門女

ポンチャンは齢を重ねたが、明るい服装にしたい。半分あの世に行ったような無彩色の服は着たくない。若者のリクルート・スーツが画一的で黒であることも見心地はよくない。女子高校生に冬でも短いスカートを強要していることも解せない。かわいいとは見えるが、健康に良くないのではないのか。制服など着ても着なくても、当人の選択に任せたらよい。皆さんのファッションが明るくならないと、世間も明るくならないから、お好きな、明るい色調の、着心地の良い服装をしてほしいものだ。

自然文化誌研究会にとっても、ぼくにとっても自然美についての師匠の一人は降矢静夫さん（現上野原市西原）だ。30 年近くのお付き合いで、彼から頂いた 300 通に及ぶ葉書をテキスト分析しようとエクセルに入力している。一瞥してすぐに仕舞い込んでしまった葉書の文面を読み返すと、四季を通じて自然への賛美が、俳句を添えて綴られている。熟読しなかったことが、いまさらながら残念で、申し訳ないとも思う。彼から頂いた門男は植物と人々の博物館のシンボルとして展示してある。民族植物学ノオトの表紙も、彼の制作した門男だ。ただし、彼のユーモアは門女も作ることだ。今、縫っている刺繍の課題は門

男・門女と降矢夫妻の四季である。93歳まで生業に勤しんだ最後の山村農人夫妻に、現代文明の最期の先に真文明の未来を見たいと考えている。

ヨーロッパの都市や田舎を巡って、美しい街も大聖堂も、村や農園も、神と人間が協働して創作した自然物の範囲にあるのではないのかと、ふと考えるようになった。大聖堂などは何百年にもわたって建造され続け、あるいは半分崩壊していても維持されているので、現代の風景にもよく馴染んでいるのである。西洋は自然 nature と人工 art を峻別し、東洋は自然と調和しているのだと、多くの日本人は学校教育で教えられるままに、そう信じているようだ。しかし、本当にそうであろうか。少なくとも今は違うと断言する。これほど自然から隔離された日本人の現代生活は高度経済成長期に前後する、ほんの 50~60 年ほど前に始まったことだ。今や、ヨーロッパのキリスト教徒よりも、日本教徒のほうが自然を忌避しているように変化してしまったかのように見える。

ぼくは自然を信仰するアニミスト、心は野蛮な原縄文人でありたい。文明人は教養（想い遣り）を失い、彼らこそ悪い心をもつ意味で似非野蛮人だ。人々は豊かな自然から恵みを受け入れて、楽しみ、感謝し、一方で、厳しい自然に抗い、透かし、祈り、信仰してきた。暮らしには苦しみばかりではなく、楽しみも沢山見つけられる。こうした慎ましく、謙虚でありながら、大らかな日々が縄文時代の山里暮らしにはあったのだろう。山里はかつて誰でも受け入れてきた。それはまれびと（折口信夫）であったのかもしれない。文明は自然から遠く離れてはならない。歴史を振り返れば、自然から離れるほどに、都市文明は崩壊に向かった。

原理とは自然に添い生業を営み、その土地から恵まれるもので生活することだ。原則とは原理に沿った自らの働きで地の食料を得て、暮らしを立てることだ。家族が楽しく幸せに暮らす身土不二は、原理である自然は身土、人間も自然に暮らす動物ということで、原則である文化は不二、原理・原則に縁ることだ。このように理解すれば、都市に浮遊する生活は原理や原則に縁らないので、都市民は自然に近い農山村で過ごす時間を意図してもつようにするのがよい。

ことかように理解したぼくは、日本人はいずれ近い機会に自然回帰するだろうと考えて、農山漁村の多面的機能における教育・文化機能および保健・休養機能を提唱したのである。この考え方は、食料・農業・農村基本法の条項にも取り入れられている。ところが、このくにの人々は自然に縁り添う信仰を失い、金権ばかりを拝むようになった。それが不幸の根源だ。今まさに、世界が際どい変曲点を迎えているので、個々人は根底にある大事な物事を探り、自律的に動かなくてはならないと思う。自由を奪われたり、悲惨な飢饉・飢餓の繰り返しはしない。美しかったくになが小汚く不幸なら、改めて、素のままの美しい暮らしに切り替えながら楽しく幸せに過ごそう。生業・基層文化を大切に継承し、学ぶなら、真文明への移行はできるかもしれない。そこで最期の未来を縄文時代後・晩期に探してみることにした。まだ国がなく、被支配の野蛮人たちが自然の中で自由に生業を営み、暮らしていた長い時間であったと思うのだ。狩猟・採集、初期農耕などの生業を営んでいたが、産業としての農業を強要されてはいなかった、すなわち、労働を強要する城市国ポリスはまだ発達してはいなかった。

生きるために、家族を守るために、野生動物・植物を狩猟・採集し、栽培化過程にあったいろいろな半栽培植物・保険作物を作ってきたのだ。半栽培段階にある植物は近縁野生種と雑種を作り、その野生種も収集されて穀物になっていた。本物の善き野蛮人たちの生活はとても複雑な原初の里山生態系をなしていたのである。水稻が作れなくて、稲の消費

を節約するために、麦・雑穀、イモ・マメや野菜を混合して、調理してきたのではない。

多様な穀物＝雑草複合を継承する価値体系は、国権力の基盤である租税・石高、さらに商品、食糧戦略物資としての水稻とは異なる価値体系にある。縄文文化の山棲の系譜による伝統的知識体系の価値を、改めて認知すべきである。縄文時代中・後期から晩期にかけて、温暖な海進の時代の丘陵では狩猟・採集から小規模家族農耕を含めた複合的生業が行われ、当時としては世界的に見ても多くの人口を維持したようだ。海が後退し、平坦湿地が拡大すると、ここに水田稲作を導入して、その高い生産を求めて人々を移定住させていったのが弥生時代だろう。集落が拡大し、自己家畜化された人々に農業労働を強要して、生産・貯蔵できる水稻の栽培が国権力を成立させたようだ。その後も、平地の城市ポリスからすると、丘陵は順わぬ辺境であった。これら辺境は自由な山民の穏やかな暮らしとともに、服わぬ権力敗者をも受け入れてきた。

世間では、CO₂などの温室効果ガス排出による気候変動を騒いでいるばかりで、現実的には課題解決をしようとはしていない。この処、元凶とされる CO₂などを減らすだけでよいのだろうか疑問に思うようになった。気候変動はもっと大きな地史的变化に縁っているのではなかろうか。CO₂は植物の光合成になくてはならないもので、悪者ではない。問題は化石資源に大きく依存する生活様式にあるので、ここを変えない限り解決はしない。電気自動車に乗っても、電気を化石資源や放射性物質を用いて作っては、都市の汚染が見えるところで減るのみで、見えない所では悪くなるばかりだろう。現代都市文明の過剰な便利さと刹那的虚無こそが、深い心のなかの問題である。

人口増加で食糧戦略に翻弄される。激増する人口を糊する為に、現代の農業技術による食料の大量生産は必要だが、他方で、家族のために安全食材を得ようとするのなら、楽しくできる範囲で、ささやかでも自給農耕をするのが良い。都市への人口集中は病気の感染流行を促す。都市民のために家畜を狭い場所で多数飼育すると、家畜もパンデミックを起こす。家畜も野外で健康に過ごす方がよいのだ。

北極の氷が解けても海面はあまり上昇しないという理屈（アルキメデスの原理）はわかるが、気候変動によって、高山や南極・グリーンランドなどの陸地氷床が融ければ、いつかは縄文海進のように海面上昇を起こすだろう。この変化過程は複雑な海流や陸地の動きにも関連するようだ。とはいえ日本列島で海進が進めば平坦地が減少し、水田稲作の適地が少なくなる。一方で、温暖化や砂漠化が進行すれば、熱帯病害虫も北上するために、人々も家畜も縄文時代のように丘陵地に移住せざるを得ない。丘陵地では広くて平らな耕地は得られない。そこで、C₄植物である雑穀類の有効性が高まる。安全な食材、多種多品目は、手間暇かけても良い小規模家族自給農耕によってしか作れない。食料資源的に見て、魚食、肉食を漸減して、マメやイモ類を含む穀菜食を広める方向に行く必要が出てくる。このためには伝統的な知識・技術体系を、身をもって継承しておかなければならない。世間が無視していてもめげずに、今、受け継がなければついに断絶してしまう。



写真 2：降矢さんとシコクビエ



写真 3：小菅村の縄文土器片（守屋秋子さん所蔵、安孫子昭二さん撮影）、三内丸山遺跡の
復元住居
2020. 2. 15

第 20 話 これからも面白い冒険探検

ぼくがまだ 20 代中頃、降矢静夫さんを初めて訪ねたのは、1975 年 10 月 4 日であった。その後、山村農の師と仰ぎ、2003 年 2 月に彼が他界されるまで、親しくお付き合いしていただいていた。現在、ぼくは彼に出会った頃の齢になり、当時の彼のように人生未知の旅への計画をせねばならなくなった。ここには不安も緊張感もあり、降矢さんをロールモデルとして、これからも面白い冒険探検がありそうだ。探検はまず調査旅行計画を立てることが楽しく、旅行の面白さの半分はその計画をたてることにあるのだろう。さらに、旅行中にはいろいろな場面に遭遇し、熱く生きている現実として緊張感があり、旅の終わりには達成感がある。その後の作業である調査報告書づくりは義務ではあるが、旅行の振り返りはまたどちらかというと細やかで、静かな楽しみということだろう。

ぼくの冒険探検の個人史は敗戦後しばらくたった頃から始まった。小学生の頃に毎年の夏休みを過ごした木曽川の輪中で始まった。一週間ほどに過ぎなかったが、親戚の子共 10 人ほどと日がな一日中、和舟を漕いだり、四手網で用水をさらってフナ、雷魚やアメリカザリガニを獲ったりと、この野良の遊び以上に面白い人生はなかった。それでも小学校 5 年生頃には少年サンデーや少年マガジンだけでなく、フィクションの海底二万マイルやノンフィクションの地底探検などの読書もするようになった。強要された中学・高校の受験勉強をやり過ごして、やっと大学生になってから、また再び、今度は植物調査のために山に向かうようになった。

高校生の頃はシュバイツァー博士を尊敬しており、医者になってアフリカに渡り、お手伝いして奉仕活動をしようと志していた。当時読んだ彼の評伝とポンチャン探検家が一番気に入っている写真を図 1 に示した。畏友小林央往さんがパキスタンの氷河のたもとで写してくれた。しかし、植物愛が嵩じて志を違え、植物園で働こうと思うようになった。名古屋の東山動植物園にはときどき授業をさぼっては昼夜に関わらず、入り浸っていた。それ以来デートは国内外何処でも健全な植物園だ。これまでの冒険探検譚で述べてきたように、偶然に必然が糾って東京学芸大学に就職して、研究者人生に憑りつかれることになった。就職しても農園経営を 40 年していたので、希望はおおよそ充たされたと言ってよいだろう。図 2 に個人史として研究内容の変化とその底にある一貫性（植物学）について示した。基礎植物学から、種レベルの進化に興味を持ち人間の匂いがする作物や雑草を研究対象にするようになり、植物の栽培化過程を研究した。この研究遍歴の過程に並行して、公害問題、農耕文化への関心から、文化人類学の調査や環境学習の教育実践を行い、これまでに少し明かしたように関連した行政策を提案してきた。

人類の進化を大まかに振り返ってみる。新第三紀鮮新世（約 600 万年前）に類人猿と分岐して、人類はその進化を始めた。主要な種分化の流れは、アウストラロピテクス・ラミドゥス（450 万年前）、第四紀更新世になってホモ・ハビリス（250 万年前）、ホモ・エレクトゥス（180 万年前）、後期更新世から完新世にかけてホモ・ネアンデルターレンシス（20 万年前～3 万年前）、そしていよいよホモ・サピエンス・サピエンスが 10 万年前に出現して現代に至っている。この間には、他にも多くの人類の祖先種が分化しては消滅してきたのである。現生人類であるホモ・サピエンスについては、6 万年前～3 万年前に文化の爆発的発達が起こった。この間に、同時に存在していたホモ・ネアンデルターレンシスは絶滅し、ホモ・サピエンスだけが現在、完新世に至るまで生存を続けている（S. ミズン 1998）。一説によれば、サピエンスがネアンデルタールを絶滅させたとも言われている。

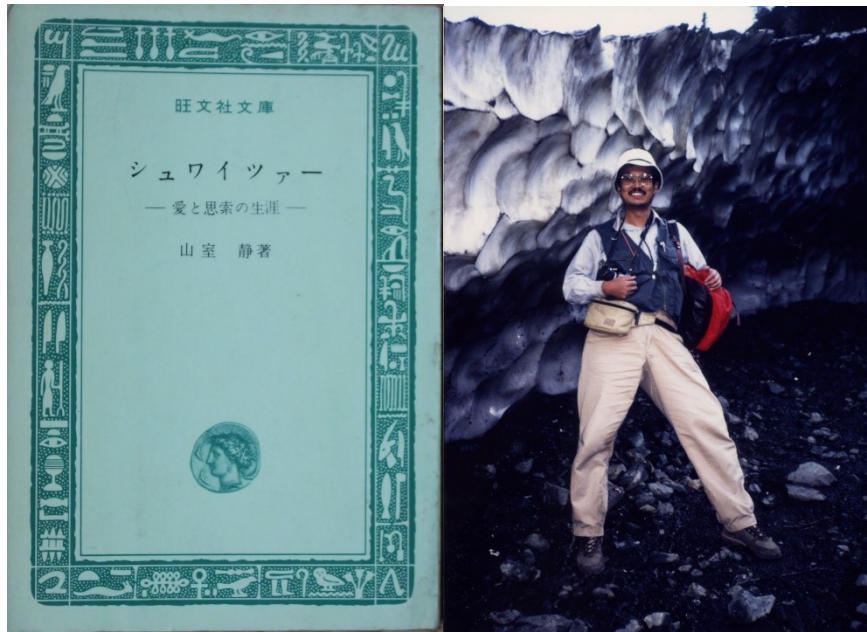


図 1. 『シュバイツァー—愛と思索の生涯—』(山室 1965) およびパキスタンの氷河の末端にて(小林央往さん撮影)。

図 2 に示したように、狩猟採集など多様な生業が基盤であった時代から、半栽培の前農耕時代を経て、約 1 万年前に植物や動物の栽培化・家畜化が進み、農業文明がムギ、イネやトウモロコシなどを権力支配の基盤として国の成立を導いたようだ。第四紀は更新世、完新世と推移してきたが、最近では、核爆弾の実験(1945 年)が行われた時から、第四紀の三番目の時代区分である人新世 Anthropocene が始まったという議論もなされている。この核爆弾はすぐに日本に落とされ、多大な犠牲を出し、第二次世界大戦は敗戦をもって終結した。この科学技術の犯罪は宗教ばかりでなく、科学の原則にも反する。聖ヨハネは黙示録で、悪人にはさらに悪を、善人にはさらに善を、聖人にはさらに聖を行わせよと言ったようなことを記されていた。ぼくは自律したアニミストであり、キリスト教徒ではないが、それでも聖ヨハネの言葉に従う他はないような日本国の世間の現実だ。

東日本大震災は東京に住むぼくにも直接的な大被害を与えた。放射性物質は少ないとはいっても舞い降り、計画停電で種子貯蔵庫は停止して低温を維持できなくなり、研究材料の種子は生存の危機に瀕することになった。そこで、急遽、約 1 万点の収集系統をイギリスの王立キュー植物園のミレニアム・シード・バンクに移管した。日本からの物資は放射性物質による汚染を疑われて、ヒースロー空港に 1 週間ほど留め置かれ、その後何とか無事にウォールハーツに届いたようだ(図 3)。これらの収集品は多くの研究者が世界各地の農民から快く好意で分けてもらった、主に雑穀の在来品種や野生近縁種の種子である(遺伝子資源ともいう)。日本愛くに者として絶望的に忍びなかった行為であった。一個人のぼくがこれほど重大な判断を瞬時にしたのだが、世間からは何の関心も示されず、援助も非難もされなかった。王立キュー植物園は学術的だが、エデン・プロジェクトは観光地的だ。ともに世界中からの来園者でいつもにぎわっていて、イギリス人の植物学好きがよくわかる。ぼくが植物学者だということ、イギリス人はみな親切であった。最近、キュー植物園では食用作物の近縁野生種を農民に配布するプロジェクトを進めているようなので、世界中

の農民の厚意にいくばくかの返礼ができたのかと、ささやかな希望を感じた。

研究者への個人史

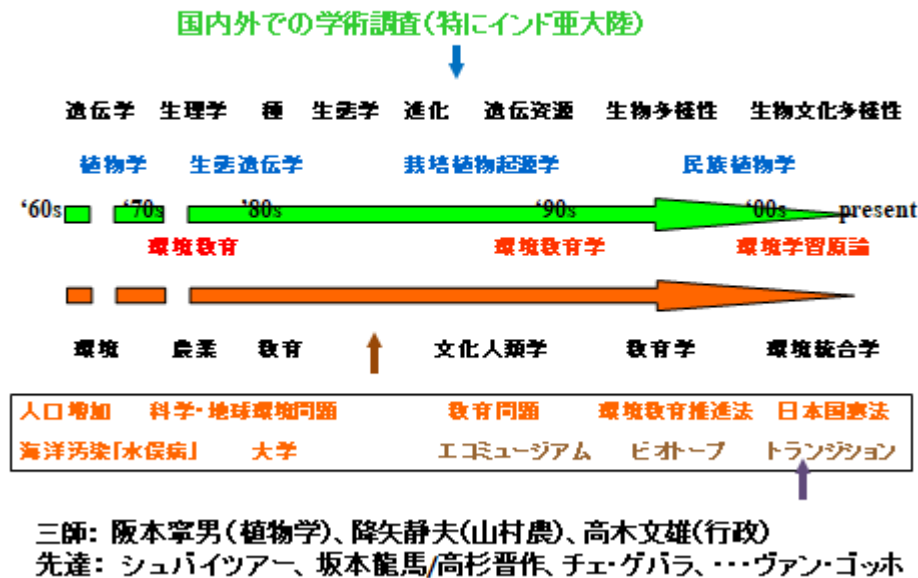


図 2. 研究の自由と責任による個人的研究内容の推移

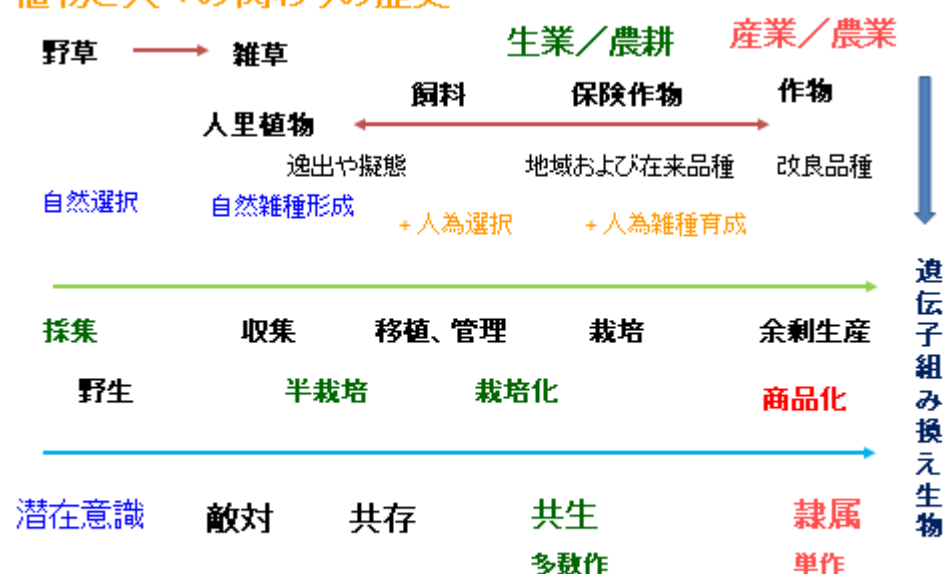
植物の栽培化過程を研究してきたぼくは人間ホモ・サピエンスの自己家畜化に抗いたい。この言葉をはじめて聞いたのは柴田敏隆（野外教育）からだったと思う。その現象論の提起は小原秀雄（1984）のようだ。ぼくは栽培植物と農耕の起源について研究を始めており、中尾佐助（1968）の農耕文化基本複合を環境教育の基盤にしようとしていた。ドメスティケーションは自然淘汰と人為淘汰によると考えていたので、自己家畜化論を認めたくなかった。なぜなら、少なくとも植物の栽培化過程は、無認識、敵対、共存、共生の進化だと考え、栽培化の達成は共生の段階であるとしたかったからだ（図 4）。人間が主体となって、植物を栽培化、動物を家畜化して共生しているのであって、一方で、柴田が言っていたように人間も上位の何者かに意図されて自己家畜化に至ったとは考えたくなかった。この概念を考察した小原秀雄（動物学）は自己家畜化の兆しは、火の利用や道具の発明以来、意図せずであり、さらにこの過程は自己内発的であると思案を深めている。

その後も議論がつづき、今、ぼくが改めて自己家畜化論を再考しようとしているのは、人間が AI などと言う情報機械に隷従する方向にあるような議論がなされるようになったからである。ホモ・サピエンスが自己家畜化をさらに進めて、神人ホモ・デウスに隷従するか、ホモ・ネアンデルターレンシスのように絶滅するか、という警告を Y. N. ハラリー（2016）がしているからである。さらに、J. C. スコット（2019）が類似の論調で、穀物の栽培化が国権力の成立を可能にして、穀物生産のために、人間を農業へと強制して、隷属させたとしている。昨今の生命科学や情報科学を応用した技術が AI から神人ホモ・デウスによって、動・植物と人間ホモ・サピエンスの共生進化の過程が隷属退化へと向かうのならば、ぼくはこの流れには強く抗う。過剰な自己家畜化による退行進化を、生業に関わることによって共生進化に向かうよう転換するために、縄文人や山村農人の暮らしぶりから学びたい。



図 3. イギリスのエデン・プロジェクト、ミレニアム・シード・バンク

植物と人々の関わり方の歴史



山村の過疎化：妥協のフロンティアが破れて、野生が越境適応

図 4. 植物と人間の関係の歴史

都市民の多くの人々が生業や農林漁業に関与せずに、大量消費・大量廃棄しかせずに、自然や生業を未知の領域に至らせたとしても、現代でも、確かに生業や農林漁業を基盤とした文化複合の上に、文明は成り立っているのだ。ところが、人新世が提起されている事象の進展の先には、想像を絶する大きな文明の変曲点があるようだ。ぼくは余生でも、人間が一層自己家畜化に陥ることに抗いたい。自由で幸せな暮らしへの希望を求めて、生き物の文明の方向に舵を切ることができるように努めたい。

山里の朴訥な人々との共感、里山の美しい景観、そのままの美しい暮らしである。しかし、希薄な関係範囲なら好いが、ムラ社会の現実には深く紛れ込むと手痛い仕打ちにあうことも多い。山村への片思いか、50年付き合ってきた、それでも、誠実な生き方に対して、心も凍り憑く排除の不条理の繰り返しだ。老人のぼくには、もうほとんど生きる気力を失うほどの出来事がまた起こった。日本人の心にもいまだに巢喰う、今だけ、金だけ、自分

だけの悪い心、旧習に現代風を加えての野蛮による不条理、これらの困難をまだ乗り越えられるのだろうか。これからもなけなしの猛勇を振り絞って、なんとか冒険の目的地に至れるのだろうか。残念ながら、こうした不条理が都市の街にはないとは決して言えないが、とりわけムラ社会に著しく残っている。こうした無自覚で陰湿な排他性に耐えられるのだろうか。山村への片想いは学問的信念、自然への信仰によって乗り越えて、まるで自虐のような行為に陥らずに、心充たされるのだろうか。しかし、このくににおいてもまだ希望を探すことを諦めることなく、雑穀街道を FAO 世界農業遺産に登録し、雑穀など栽培植物の在来品種を継承すると言う冒険探検旅行の途上である。過去から現在までの直接体験を深く検証して書き記すことだけはしておきたい。

世界の潮流は大きく変化していると思う。昨年から国連家族農業の 10 年が始まった。国連で小農宣言（2018）も採択され、インド政府提案で国際雑穀年（2023）も進められるようだ。遠くアフリカからインドや中国を経て、極東の日本にまで至った、命の糧である雑穀を絶滅させずに、継承するという、ぼくの最後の冒険探検は残り少ない人生の時間をかけた総集的な行動を求められているようだ。縄文時代の遺跡から発見されれば文化財だということではない。山村農人が継承して、今に至るまで毎年栽培が続けられ、生き物として保存されてきた雑穀などの在来品種が、高齢篤農と共にそれでもいよいよ絶滅に瀕しているのだ。もう一度、生業研究チームを作って自然との共生の途を探り、ホモ・サピエンス・サピエンスを従属に導くような自己家畜化の退行進化には抗おう。根性だ、ポンチャン。おまえは原日本人、縄文人の末裔だ。

（第 20 話をもって、冒険探検粉塵記の第 1 シーズンとする。第 2 シーズン（第 21 話）からは素のままの美しい暮らしを探索することにしたい。2020. 3. 15）

文福洞先斗 （木俣美樹男）

1948 年、愛知県生まれ。静岡大学理学部生物学科卒業、東京教育大学大学院農学研究科修了、農学博士（京都大学）、東京学芸大学名誉教授、2020 年 3 月まで東京外国語大学アジア・アフリカ言語研究所フェロー。民族植物学および環境学習原論専攻。農科大学（インド、バンガロール）、ケント大学・王立植物園キュー（イギリス、カンタベリー／ロンドン）、ラジャバト・プラナコン大学（タイ、バンコック）ほか、国立遺伝学研究所、国立民族学博物館などで、研究・研修を行った。東京学芸大学農場（現・環境教育研究センター）を 40 年間維持管理、自然文化誌研究会、雑穀研究会、日本環境教育学会などを創業した。

雑穀の起源と伝播の研究で日本およびユーラシア各地のフィールド調査に従事した。特に、生物文化多様性保全に関心を持ち、雑穀と野菜の在来品種の保存、調理法の調査を行ってきた。訳書に『民族植物学』、共著に『持続可能な社会のための環境学習』などがある。調査研究などの活動はウェブサイト「生き物の文明への黙示録」に記録している。

<http://www.milletimplic.net/>

冒険探検粉塵記 増補改訂版

2020 年 3 月 17 日

著者 文福洞先斗 (木俣美樹男)
特定非営利法人 自然文化誌研究会 植物と人々の博物館
連絡先 kibi20kijin@yahoo.co.jp
